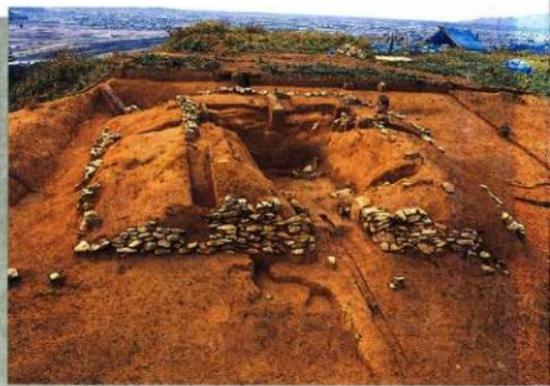


斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

光明寺3号墓・4号墳



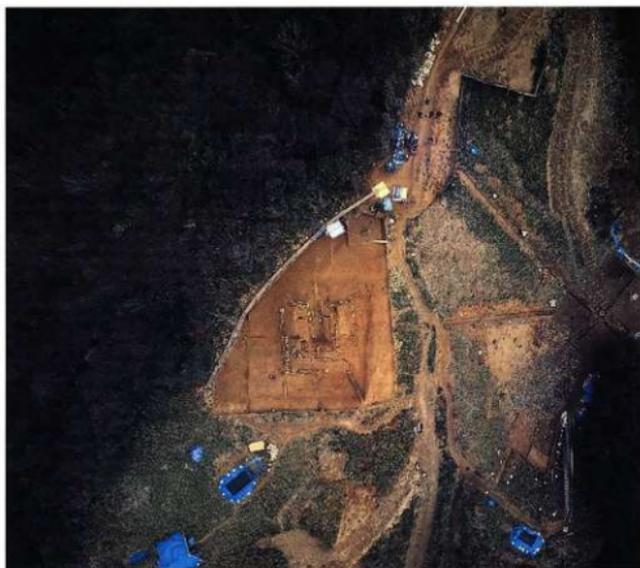
2000年3月

建設省 出雲工事事務所
出雲市教育委員会

光明寺 3 号墓



光明寺 4 号墳



序

出雲市教育委員会では、建設省中国地方建設局からの委託を受け、島根県教育委員会とともに、平成8年度より斐伊川放水路建設予定地内の遺跡発掘調査を行っております。本書は平成10年度に発掘調査を実施した、光明寺3号墓、4号墳の調査結果をまとめたものです。

光明寺3号墓は、マウンドを伴った火葬墓という全国的にも珍しい遺跡です。古墳の特徴も見られることから、古墳時代から火葬へと変化していった過渡期の遺跡として新聞等に取り上げられたこともあり、すでにご存知のこともあろうかと思えます。また、建設省の御協力のもとに、遺跡の現地保存を実現することができました。

光明寺4号墳は石室はすでに盗掘を受けていたものの、外護列石が非常によく残っており、古墳時代の出雲を解明していく上での貴重な一資料となりました。

なお、発掘調査及び本書の刊行に当たりましては、建設省中国地方建設局出雲工事事務所をはじめ、各方面から御支援、御協力をいただきましたことに対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は平成10年度（1998）に出雲市教育委員会が、建設省中国地方建設局に委託を受けて実施した斐伊川放水路建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査のうち、「光明寺3号墓・4号墳」の報告である。
2. この調査による出土遺物、実測図及び写真は出雲市教育委員会が保管している。
3. 光明寺3号墓・4号墳の調査に関する調査組織は以下のとおりである。

〈平成10年度〉現地調査

調査主体	出雲市教育委員会		
事務局	出雲市教育委員会	文化振興課	課長 後藤 政司 課長補佐 川上 稔
(光明寺3号墓) 調査員	出雲市教育委員会	文化振興課	主事 片倉 愛美
調査補助員			臨時職員 鬼村奈津子 同 渡邊 真二
(光明寺4号墳) 調査員	出雲市教育委員会	文化振興課	主事 高橋 智也
調査補助員			臨時職員 春木 崇志

〈平成11年度〉整理作業・報告書作成

調査主体	出雲市教育委員会		
事務局	出雲市教育委員会	文化振興課	課長 大田 茂 課長補佐 川上 稔
(光明寺3号墓) 調査員	出雲市教育委員会	文化振興課	主事 片倉 愛美
調査補助員			臨時職員 福田 和美
(光明寺4号墳) 調査員	出雲市教育委員会	文化振興課	主事 高橋 智也
調査補助員			臨時職員 石橋 弥生 同 永瀬 周子

4. 掲載図面は主に高橋智也、片倉愛美、石橋弥生、福田和美、永瀬周子が作成し、写真は高橋智也、片倉愛美が撮影した。
5. 掲載図面のトレース等整理作業は荒木恵理子、吹野初子が行った。
6. 縮尺は挿図中に掲載している。また、方位については国土座標の軸方向による。
7. 本書の執筆・編集については調査員が分担して行った。執筆分担については目次に掲載している。

平成10年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、出雲市教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者協定に基づき、出雲市教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

〔現場事務所長〕 布村 幹夫 〔技術員〕 金光 克至、保科 昭 〔積算〕 藤原 智治
〔事務員〕 木村 恵

作業員 鐘推 蔵吉、上代 勇、宝正千賀子、和田 昭七、高橋ナツエ、河合 良治、
吾郷園生子、来間 達夫、三島 文子、勝部 初子、秦 幸正、駒 孝次郎、
佐藤 保信、神門 幸子、藤江 実、有田 俊夫、森山 貞治、松井 静代、
竹田美代子、島田 幸雄、井上 茂、公田 悦郎、大島 唯、小玉 勇

なお、調査・整理については以下の方々から多大なる助言・指導・協力をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）

前園実知雄（奈良芸術短期大学教授）、井上見孝（鳥取大学助教授）、田中義昭（鳥根大学教授）、渡邊貞幸（鳥根大学教授）、森 郁夫（帝塚山大学教授）、西尾克巳（鳥根県埋蔵文化財調査センター）、守岡正司（鳥根県教育庁文化財課）、渡邊正巳（文化財調査コンサルタント）、鈴木裕篤、山本恵一（沼津市教育委員会）、大谷弘幸、當眞嗣史（財団法人君津都市文化財センター）、内田敏夫、萩原智至（伊豆長岡町教育委員会）、加部二生（新単村教育委員会）

目 次

1. 調査に至る経緯	(高橋) 1
2. 位置と環境	(片倉) 2
3. 光明寺3号墓	(片倉) 6
4. 光明寺4号墳	(高橋) 26
5. 光明寺古墳群と上塩冶地域の後・終末期古墳	(高橋) 44
6. 出雲市上塩冶町光明寺3号墓火葬骨	(鳥取大学 井上晃孝) 54
7. 出雲平野の石製骨蔵器	(片倉) 64
8. 光明寺3号墓 保存に至る経緯	(片倉) 70

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	石製骨蔵器周辺実測図	6
第3図	地形測量図（調査前）	7
第4図	マウンド 石実測図	8～9
第5図	マウンド及び周辺セクション図	10～11
第6図	石製骨蔵器 蓋 実測図	12～13
第7図	石製骨蔵器 身 実測図	14～15
第8図	火葬人骨実測図	17
第9図	全国石櫃（石製骨蔵器）分布図	18
第10図	千葉県 江川熊野神社境内遺跡 略測図	19
第11図	静岡県 清水柳北1号墳 墳丘実測図	20
第12図	岡山県 唐臼墳墓群 実測図	20
第13図	群馬県 武井庵寺跡 実測図	21
第14図	光明寺4号墳 調査前全体図	24～25
第15図	周辺地形測量図	26
第16図	外護列石出土状況	28～29
第17図	東側周濠内土層堆積状況	30
第18図	南側周濠内土層堆積状況	30
第19図	北側表土堆積状況	30
第20図	内部主体実測図	32～33
第21図	石室内埋土堆積状況	34～35
第22図	光明寺4号墳 調査後総括図	36～37
第23図	出土遺物実測図	38
第24図	地山加工状況	39
第25図	墳丘断割土層堆積状況	40
第26図	光明寺4号墳の築造課程	41～43
第27図	光明寺古墳群 分布図	44
第28図	光明寺3号墓・4号墳 測量図	45
第29図	後・終末期古墳 石室実測図①	48
第30図	後・終末期古墳 石室実測図②	49
第31図	後・終末期古墳 分布図（上塩冶地域）	50
第32図	菅沢古墓 石製骨蔵器実測図	64
第33図	朝山古墓 石製骨蔵器実測図	65
第34図	小坂古墳 石室内石櫃実測図	66～67

調査に至る経緯と経過

斐伊川放水路建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査は平成3年度（1991）より、島根県教育委員会によって進められてきた。しかし、埋蔵文化財発掘調査の対象となる地域には多くの遺跡が存在しており、発掘調査量の増大により斐伊川放水路建設工事が遅れている状況にあった。そのため、平成7年（1995）に建設省出雲工事事務所と島根県教育委員会より出雲市教育委員会に対して、発掘調査の一部を担当してほしいとの依頼があり、それを受けて平成8年度（1996）より出雲市教育委員会も同事業地内の埋蔵文化財発掘調査を担当することとなった。なお、三者協議の結果、放水路本体部分の調査を島根県教育委員会が、工事用道路や残土処理場等の付帯工事部分の調査を出雲市教育委員会で分担することで合意している。

平成10年度（1998）に出雲市教育委員会によって担当した調査地区は、斐伊川放水路建設工事に伴う工事用道路の予定地内と残土処理場である。本書で報告する光明寺3号墓・4号墳は工事用道路の予定地内に立地しており、当初は光明寺3号墓のみが周知の遺跡であったものの、本調査前（平成8年度）に実施した試掘調査によって光明寺4号墳の存在が明らかとなり、3号墓と同時に調査を実施することとなった。

調査は平成10年4月より開始した。当初は記録保存を前提とした調査であり、3号墓・4号墳を並行して調査を進めていったが、3号墓は石製骨蔵器が直葬されているマウンドを持つ古墓で、全国的にも貴重な遺跡であることが明らかとなり、出雲市教育委員会としては3号墓の現地保存を事業主体者である建設省出雲工事事務所に要望している。また、3号墓は石製骨蔵器の蓋を開け、後方斜面の確認をした状態で、4号墳は外護列石及び周壕を検出した状態で平成10年11月29日に現地説明会を開催した。

その後、建設省出雲工事事務所との協議の結果、斐伊川放水路建設工事に伴う工事用道路のルートを変更し、3号墓は現地保存、4号墳は記録保存とすることで合意した。

なお、調査は平成10年度中に全て終了している。

位置と環境

光明寺古墳群は、出雲市上塩治町と馬木町の境に所在し、出雲平野の南側の山腹に散在する、4基から成る古墳群である。

出雲平野は、北に島根半島、南に中国山地という山塊に挟まれた地域であり、神戸川、斐伊川という二大河川の沖積作用によって形成された、肥沃な土地である。この斐伊川によって沖積平野の微高地である自然堤防が残されたため、地形条件に制約されながらも、人々はそこに生活の営みの場を求めることができた。現在のような地形になったのは、約3600年前から西進して大社湾に注いでいた斐伊川が、逆流して宍道湖に流れ込むようになった江戸時代のことである。

以下、出雲平野及び周辺部の遺跡の概観を述べる。

縄文時代

平野北側に、最も古く前期の繊維土器を出土している菱根遺跡、西側には早期末から前期初めの遺物が出土した上長浜貝塚など、平野縁辺部に遺跡が営まれている。中期の遺跡は確認されていないものの、後期、晩期になると三田谷Ⅰ遺跡など平野縁辺部から、矢野遺跡のような平野中央部へも広がっており、人々がよりよい環境を求めて移り住んでいった過程が窺える。

弥生時代

縄文時代から続いている遺跡が多く、先に述べた矢野遺跡や原山遺跡で遺物が確認されている。原山遺跡からは配石墓が検出された。これらは規模としては小さいものであるが、これまでに調査が行われた小山遺跡群、大塚遺跡群、白枝荒神遺跡などは一連の集落群と考えられ、四結遺跡群という見方もなされている。

中期には、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡など、平野中央部から神戸川西岸にも集落が広がっていたことが確認できる。これらの集落は大規模であり、出雲平野の有力者の存在を窺わせているため、斐伊川町神庭荒神谷遺跡や加茂町加茂岩倉遺跡の青銅器との関連についても考察されているが、未だそれらの関連性を裏付けるような資料は検出されていない。

後期には、山持川川岸遺跡など遺跡の分布にも広がりが見られるようになる。

また、斐伊川左岸の丘陵上には四隅突出型墳丘墓を持つ西谷墳墓群が造営される。その中の3号墓には古備など他地域から搬入された土器も供献されており、被葬者はかなり広範囲にわたって交流をもっていた有力人物であると考えられる。

古墳時代

この頃になると、古志本郷遺跡や天神遺跡など神戸川流域の遺跡は姿を消す。その一方で、神西湖周辺に遺跡が広がり始め、平野の中心部には主だった集落等の遺跡は見られなくなる。

四隅突出型墳丘墓も突然姿を消し、出雲平野の空白の時間がある。

前期末になって、ようやく古墳が姿を現す。まず、北山山麓に位置する大寺古墳で、全長50m、堅穴式石室を有する出雲では最古の前方後円墳である。また、神西湖の東に位置する山地古墳も径24mの円墳で、筒形銅器や鏡が出土しており、出雲の古墳時代の始まりを解き明かすのに重要な遺跡とな



第1図 周辺遺跡分布図

遺 跡 名

- | | | |
|-------------|--------------|-------------|
| 1. 光明寺古墳群 | 14. 天神遺跡 | 27. 白枝荒神遺跡 |
| 2. 小坂古墳 | 15. 菅原古墳 | 28. 小山遺跡 |
| 3. 大坊古墓 | 16. 斐伊川鉄橋遺跡 | 29. 矢野遺跡 |
| 4. 三田谷遺跡群 | 17. 古志本郷遺跡 | 30. 高浜Ⅰ遺跡 |
| 5. 半分城跡 | 18. 大梶古墳 | 31. 高浜Ⅱ遺跡 |
| 6. 地藏山古墳 | 19. 田畑遺跡 | 33. 高岡遺跡 |
| 7. 神門寺境内廃寺 | 20. 放れ山古墳 | 34. 稲岡遺跡 |
| 8. 上塩冶築山古墳 | 21. 妙蓮寺山古墳 | 35. 山持川川岸遺跡 |
| 9. 上塩冶横穴墓群 | 22. 地藏堂横穴墓群 | 36. 修理免本郷遺跡 |
| 10. 菅沢古墓 | 23. 深田谷横穴墓群 | 37. 菱根遺跡 |
| 11. 長者原廃寺 | 24. 知井宮多聞院遺跡 | 38. 原山遺跡 |
| 12. 下沢古墳 | 25. 山地古墳 | 39. 鹿蔵山遺跡 |
| 13. 今市大念寺古墳 | 26. 上長浜貝塚 | |

っている。

中期には北光寺古墳、軍原古墳、神庭岩船古墳が営まれ、それに伴って小規模な古墳も増加するが、首長墓系列が見あたらないことから、この時期には強大な勢力を持った人物の存在については否定的な見方が強い。

後期にはいと、方墳を中心とする出雲東部とは対照的に、円墳を主流とした大型墳が築造される。今市大念寺古墳は全長91mで、県内最大の前方後円墳である。長大な横穴式石室の中には日本最大級といわれる家形石棺が納められている。

また、それに続くとされる上塩冶築山古墳も切石造りの整美な横穴式石室を持ち、内部からは馬具、太刀など多くの副葬品が出土している。

このあと、出雲平野の首長墓系列として地藏山古墳に繋がっていくと考えられているが、この同時期に出雲東部では県内最大の山代二子塚古墳（前方後方墳）や山代方墳が造られており、出雲地方を東西に二分するような強大な勢力が存在したことが窺える。

7世紀頃には横穴墓が造られ始め、神戸川の両岸に2大横穴墓群が形成される。右岸に位置する上塩冶横穴墓群は近年調査が進んでいるが、横穴墓内部より金糸や太刀など、豪華な副葬品の存在が確認されていることから、かなりの有力者が埋葬されていたことが分かっている。

奈良・平安時代

出雲平野は、律令制の行政区画でいえば神門郡と出雲郡の一部にあたる。平成10年度の鳥根県教育委員会の発掘調査により、古志町の古志本郷遺跡が神門郡家の一部と思われる遺構が検出されている。

また、古代寺院として神門寺境内廃寺や天寺平廃寺があり、これらは「出雲風土記」に記載されている「新造院」との比定が進められている。

集落遺跡をみても、大寺三蔵遺跡や上長浜貝塚などが知られている。

中世

出雲国の政治の中心は、松江市大草町におかれた出雲国庁であった。しかし、出雲大社やその別当寺である鯛淵寺、また、出雲平野中央部の塩冶郷に出雲守護職佐々木氏が守護所をおくなど、鎌倉時代の後半期には政治の中心となった時期もあった。

蔵小路西遺跡や矢野遺跡からは広い居館跡が検出されており、当時の日常生活の様子が窺える道具類が出土している。

戦国時代には、毛利氏と尼子氏の争いにより、丘陵上に多くの山城が築かれた。代表的なものとして、鷹ヶ巣城、大井谷城などが挙げられる。

以上、相次いで発掘調査が進んだため、出雲平野における歴史が次第に明らかに成りつつある。

(参考文献)

- ・「遺跡が語る古代の出雲 ―出雲平野の遺跡を中心として―」 1997年 出雲市教育委員会
- ・「三田谷 I 遺跡 (斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V)」 1999年 島根県教育委員会
- ・「渡橋沖遺跡 (一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 3)」 1999年 島根県教育委員会
- ・「姫原西遺跡 (一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 1)」 1999年 島根県教育委員会
- ・「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」 1980年 島根県教育委員会

光明寺3号墓

光明寺3号墓は出雲市の南部、馬木町と上塩冶町の境の尾根上よりやや下がったところに位置している。本遺跡は早くから古墳として確認されており、光明寺古墳群の1つ光明寺3号墳として報告されていた。

調査前のマウンドは、径約8m、高さ約1mの円形で、すでに表面に人頭大の石が不規則に露出していた。古墳としてはマウンドに高さがなく、葺石としては石が重なり合うようになっていたことから、経塚の可能性もあると考えていた。

調査区をまず3m四方の17グリッドに分け、表土を剥ぎつつ全体に広がっている石の実測を行った。同時にマウンドのほぼ中心で直交する形に幅30cmのサブレンチを設定し掘り下げたところ、約40cm程掘り下げたところで、石製骨蔵器の蓋の南西側の角を検出した。

〈マウンド〉

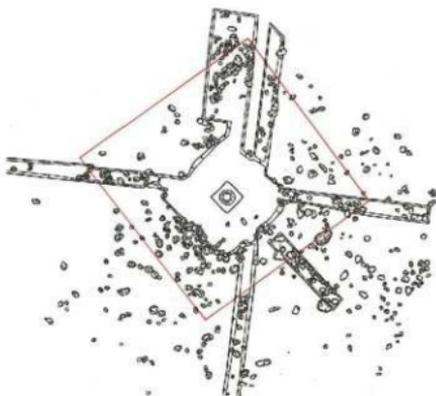
石製骨蔵器が埋納されていたマウンドは、調査前の測量では円形を呈しているように思われたが、調査の結果、裾と思われる部分に石が直線的に並んだように配置されていることを確認した。これらの石は現在確認できる段階で方形、または多角形を呈しているものと考えられる。

この石を境に、マウンドと逆側の土は黒っぽい土で、古墳の周濠などで見られるような土と酷似していることから、マウンドと、その周囲をはっきり区別する役割も果たしていたと思われる。

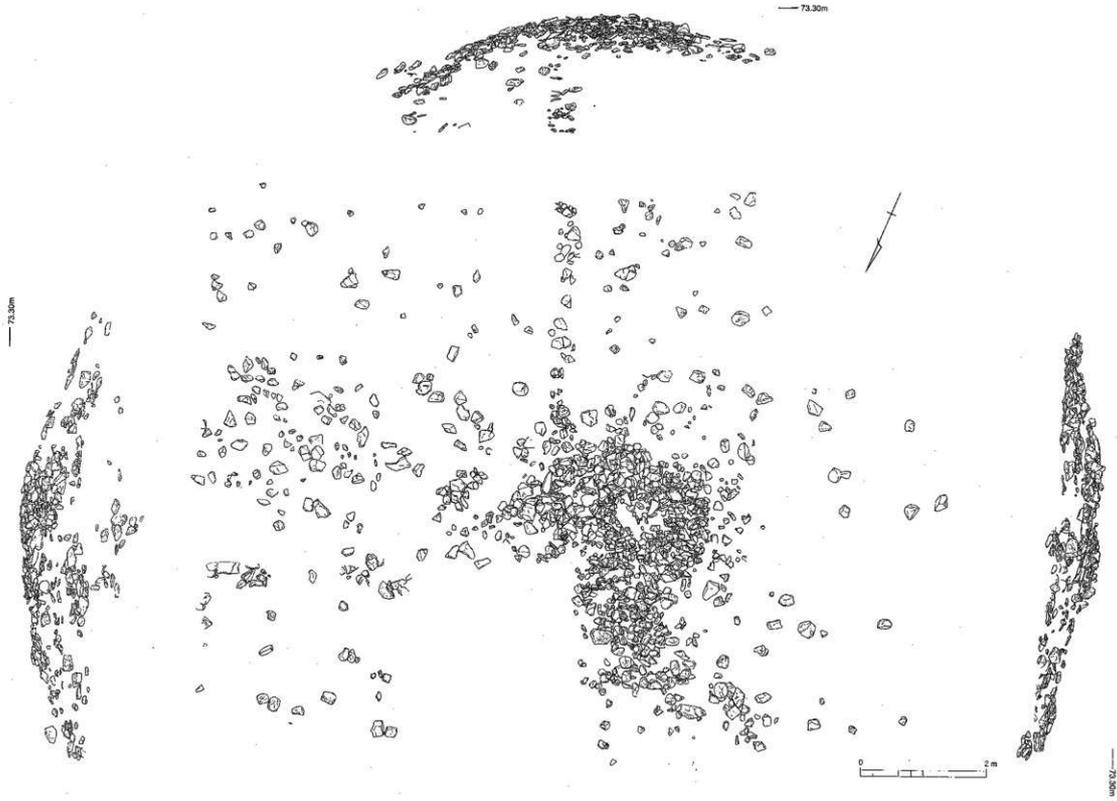
マウンドは、大きく4回に分けて構築されている。

- ①地山の上に小さな礫の混じった粗い土を高さ60cmほど盛る。その上に石製骨蔵器を置く。
- ②石製骨蔵器の身の上面から10cm下がったところまで土を盛る。
- ③蓋をした石製骨蔵器の周りに目張り土を施し、石製骨蔵器の周囲に厚さ10cm程度の炭を敷く。
- ④全体を土で覆い、その上からさらに石を不規則に置く。

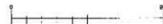
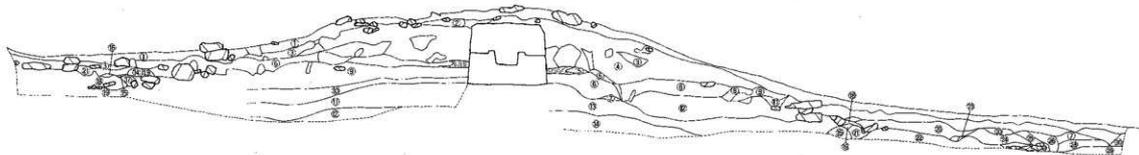
人頭大の石は、マウンドの表面だけでなく土中にも含まれていたため、④の段階である程度石の混じっている土で全体を覆ったものと考えられる。この土中の石は石製骨蔵器の南東側はまるで敷き詰めたかのように石が埋まっていたが、それ以外の部分はまばらでしかなかった。



第2図 石製骨蔵器周辺実測図

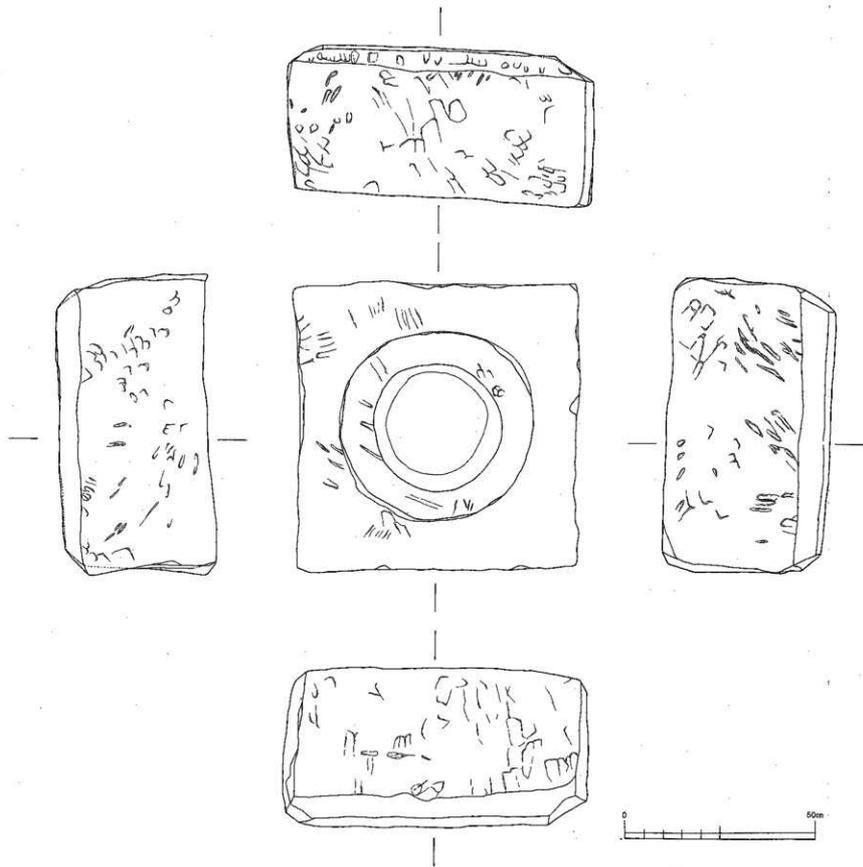


第4図 マウンド 石実測図

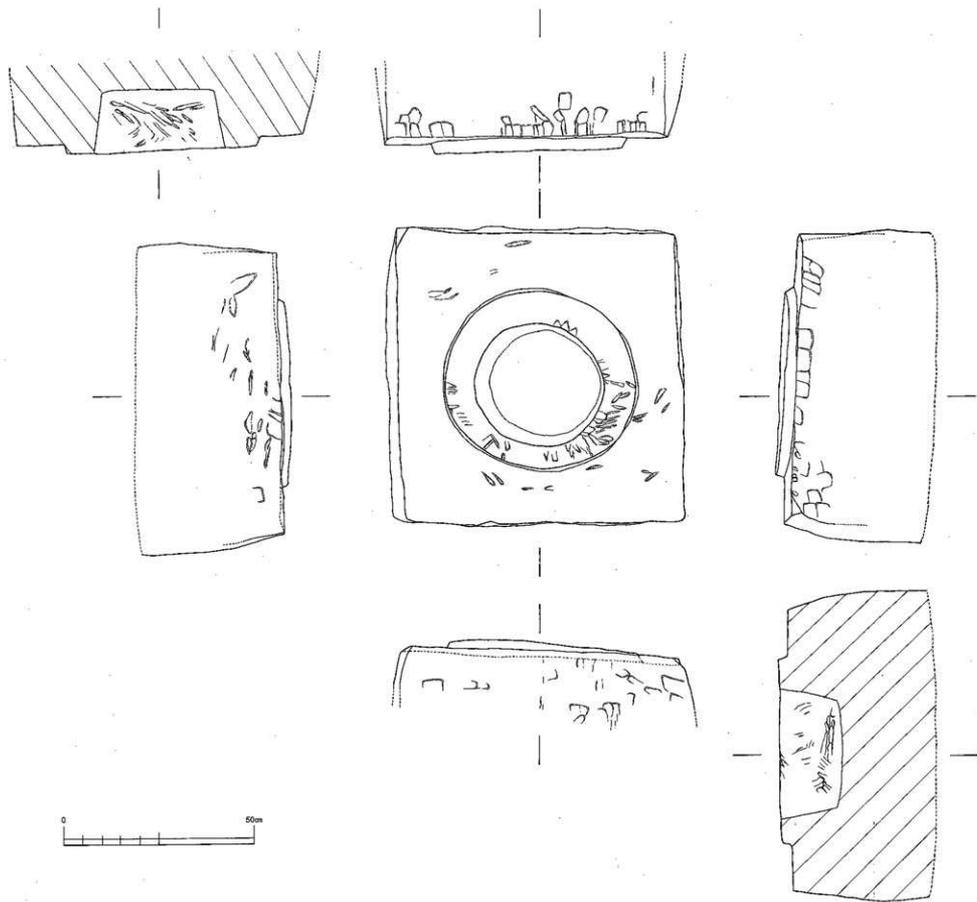


- | | | | | | | | |
|----------|-----|--------|------------------|----------|-----|-----|-------------------|
| ①. 7.5YR | 4/3 | 褐色 | 黄土 | ⑩. 10YR | 4/6 | 褐色 | しまっている やや暗め |
| ②. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 空気を多く含んでおり崩れやすい | ⑪. 7.5YR | 4/6 | 褐色 | 他の層よりも やや粘質 |
| ③. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている | ⑫. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | しまりがなく崩れやすい |
| ④. 10YR | 3/4 | 暗褐色 | オレンジ色の粒が混じっている | ⑬. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている |
| ⑤. 10YR | 3/3 | 暗褐色 | 固くしまっている | ⑭. 10YR | 4/4 | 褐色 | ややしまっている |
| ⑥. 10YR | 4/4 | 褐色 | ややうす黒い | ⑮. 7.5YR | 4/6 | 褐色 | ややしまっている |
| ⑦. 10YR | 4/4 | 褐色 | | ⑯. 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | 崩れやすい |
| ⑧. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 炭がわずかに混じる | ⑰. 7.5YR | 3/3 | 暗褐色 | 崩れやすい |
| ⑨. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 8層より暗い色 | ⑱. 7.5YR | 3/4 | 暗褐色 | 崩れやすい |
| ⑩. 10YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている | ⑲. 7.5YR | 3/3 | 暗褐色 | 崩れやすい |
| ⑪. 7.5YR | 4/6 | 褐色 | しまりがなく層が混じっている | ⑳. 7.5YR | 3/4 | 暗褐色 | 固くしまっている |
| ⑫. 5YR | 4/4 | にぶい赤褐色 | 11層よりも多くの礫を含んでいる | ㉑. 10YR | 2/2 | 黒褐色 | 固くしまっている |
| ⑬. 7.5YR | 3/3 | 暗褐色 | しまりが無い | ㉒. 7.5YR | 4/6 | 褐色 | 他の層よりもやや粘質 |
| ⑭. 7.5YR | 2/2 | 黒褐色 | | ㉓. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | |
| ⑮. 10YR | 2/2 | 黒褐色 | | ㉔. 7.5YR | 3/3 | 暗褐色 | 固くしまっている |
| ⑯. 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | | ㉕. 7.5YR | 3/4 | 暗褐色 | しまりがなくて崩れやすい |
| ⑰. 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | | ㉖. 7.5YR | 3/4 | 暗褐色 | 8層よりやや暗い |
| ⑱. 7.5YR | 2/2 | 黒褐色 | しまりが無い | ㉗. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている |
| ⑲. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている | ㉘. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | ややしまりが無い |
| ㉑. 10YR | 3/4 | 暗褐色 | 固くしまった土 | ㉙. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 斑點が黒化した緑色の礫が入っている |
| ㉒. 10YR | 3/4 | 暗褐色 | 攪乱? ややしまりが無い | ㉚. 7.5YR | 4/4 | 褐色 | 固くしまっている |
| ㉓. 10YR | 4/4 | 褐色 | ややしまっている層 | | | | |

第5図 マウンド及び周辺セクション図



第6図 石製骨藏器 蓋 実測図1/10



第7图 石製骨藏器身 实测图 1/10

表面の石は周辺での植林の際に動かされた可能性があるが、埋土中の石についてはその可能性は少ない。このため、マウンド上及び埋土中の石の並べ方については規則性はなかったと考えられる。

マウンドの形状については、幅30cm～50cmのトレンチで確認したにすぎないので、今後の調査での確認を要するものであるため、推測の域をでない。

〈石製骨蔵器〉

身 75cm×75cm、厚さ39cmである。外面には加工痕がはっきりと残っており、南面を除く3面は、平刃状の工具で幅を持たせて加工している。注目されるのは、この身を握えて蓋との合わせ目から下に10cm程のところまで埋めて炭を敷き詰めているが、この炭の面から下の部分の身の外面は、上部10cmに比べてかなり粗い加工となっている。これはあらかじめ埋めて見えなくなりことを想定して加工されたものと思われ、この炭の面で埋納をいったん止め、何らかの形で人の目に触れる機会があったのではないかと思われる。

蓋と合わさる面は外面よりも丁寧加工されており、加工痕はほとんど確認できない。蓋と合わさる面のほぼ中央に外径46.5cm、内径32.5cm、高さ2.5cmの円形の立ち上がりがあり、その内部は深さ16.5cmに削り込まれており、約1体分の人骨が納骨されていた。円形部分の上面は、外面の溝状の加工痕よりも細かく加工されており、恐らく、加工した後磨きなどの処理を施したものと考えられる。内部は壁面斜め方向にほとんどが下に向かって加工されているが、底面との境界部分はその境界をはっきりさせるためか、横方向に加工されている。上面及び削り込み内面については外面と比べてかなり丁寧な加工がされている。

また、外面の南面と西面が合わさる角は面取りがされており、蓋にも同様の加工が施されている。これは方向を合わせるときの目印にしていたものではないか、と考えられる。

蓋 75cm×75cm、厚さ40cmで、上面の稜は家形というよりも、むしろ方形の箱を面取りをしたように斜めに加工されている。外面には溝状及び平刃状の工具で加工したと思われる加工痕がはっきりと残っている。北面は、溝状の加工痕が多く、凹凸が目立ち、加工状態は粗いように思われる。東面は、平刃状工具による加工痕が多く、また方向が上から下、または下から上と揃っている。南面は、他の面よりも比較的細かく小刻みに加工されている。西面は加工の方向や恐らく工具も何種類かで行っておりため、他の面に比べて加工痕がはっきりとしている。上面は斜めに削られた四辺については加工痕がみられるが、平坦面には凹凸はあるものの、多少風化しているのか、はっきりとした加工痕はほとんど認められない。

身と合わさる面は身の場合と同じく加工痕がほとんどみられない。ほぼ中央が外径49cm、内径29cmで、2段に削り込まれている。1段目は4.5cm、2段目は16cmに削り込まれており、身の立ち上がりに合うような形で加工されている。削り込み内面は身の削り込みと同じように境界部分のみ横方向に加工され、壁面はほぼ加工痕が分からないくらい丁寧に加工されている。

この石製骨蔵器は、南北の辺が磁北と一致しており、埋納する際方角を意識していたものと思われる。

石製骨蔵器に用いられている石材は凝灰質砂岩といわれるもので、大変柔らかく、加工が容易である。石の状態から、蓋と身はもともと同じ石として切り出されたものを、加工する際に2つに分けたものであることが分かる。この付近には大井谷石切場跡など、多くの石切場が確認されているが、それらの石切場の石よりも緻密であるため（註1）、恐らく別の場所から持ってこられたものと思われる。



〈火葬人骨〉

石製骨蔵器の中には、約1体分の火葬した人骨が納められていた。これは鳥取大学医学部 井上晃孝助教の鑑定により、40歳代の熟年男性であることが判明した。

内部には土等異物はほとんど入っておらず、ほぼ密閉された状態が継続していたものと思われる。人骨については、井上先生より玉稿を賜っている。



〈周辺斜面〉

調査当初はマウンド部分のみを調査区として考えていたが、石製骨蔵器が発見された際の調査指導で、周辺斜面も墓域の可能性があると指摘を受けた。これを受けて斜面の草刈りを行ったところ、北西側を中心にほぼ全面にマウンドと同じような人頭大の石が露出し、不規則に広がっているのを確認した。

第8図 火葬人骨実測図

この斜面が人工的なものであり、マウンド（＝火葬墓）に伴うものであるなら、全国的にも例がないものとして、保存の必要性がでてきたため、比較的石が多い北西側を含め、3本のトレンチを設定し、それぞれT-1、T-2、T-3とし、確認を行った。

石が最も多く、積み重なるように広がっていたT-1は、保存の関係もあり、表土を剥いだ時点でそれ以上の掘り下げは行わなかった。

T-2は斜面の角度が最も急な部分であるが、石がほとんどなく、北西側に多く見られる石はここまでは広がっていなかったことを確認した。トレンチの最下端部にも石が見られなかったため、角度が急なため、斜面の下に崩落した可能性も低いと考えられる。また、石は地山の上に堆積している土に多少含まれているものの、地山には入っていないため、自然のものとは考えにくい。

T-3は比較的斜面が緩やかで、表面に石も見られなかったが、約20cm掘り下げたところでT-1ほど密集してはいないものの、やはり同じような人頭大の石を確認した。また、T-3に直交する形でトレンチを設定し確認を行ったが、ある程度の範囲に石が広がっていることが判明した。

この斜面からは、甕等の須恵器片が数点出土している。

マウンド及び周辺斜面に広がる石は、付近の地山にも含まれているものである。しかし、この斜面やマウンドに含まれているものは石によって風化の度合いが違うこと、また石の集積状況が地山の状態と比べて異常に多いことから、付近の山から石を調達してきて造墓の際に用いたものと考えられる。

〈南側斜面〉

マウンドの南側の、谷に続く斜面についてもT-4、T-5を設定し、確認を行った。しかし、深さ約40cmほど掘り下げたところで岩盤が検出され、遺構は検出されなかった。T-4の最上部より、須恵器片が3点確認されている。

考察

光明寺3号墓のように明確なマウンドを伴う石製骨蔵器(石櫃)は現在までに、

- ・静岡県沼津市 清水柳北1号墳
- ・千葉県木更津市江川 江川熊野神社境内遺跡



第9図 全国石櫃(石製骨蔵器)分布図

- ・千葉県市原市 金出台遺跡（註2）
- ・群馬県勢多郡新里村 武井庵寺跡
- ・三重県志摩郡阿児町 珍敷古墓（註2）
- ・岡山県久米郡中央町 唐白墳墓群 の7例が判っている。

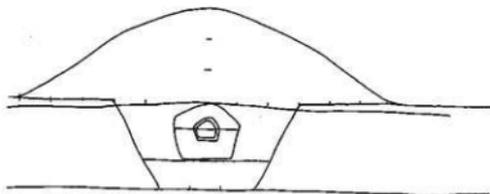
なお、埼玉県本庄市の旭・小島古墳群三田支群11号墳についてもマウンドを伴っているが、(文献1) これについては「古墳の追葬の可能性がある」ということで、対象としない。

この他、出土状況が分からない石製骨蔵器（石櫃）については、古くに発見されたために地形が分からないものもあると思うが、全国の石製骨蔵器（石櫃）の出土数から考えると、マウンドを伴うのは稀な例だといえる。また、群馬県では100以上の石製骨蔵器（石櫃）が確認されているが、マウンドを伴っていると確認できているのは先に挙げた1例のみである。これは、マウンドを伴う例は稀であるとともに、群馬県内で出土している石製骨蔵器（石櫃）は8～10世紀と、火葬が普及してからのものが多く含まれているためと考えられる。

なお、千葉県のものについては「骨蔵器を納めた埋葬施設の上に墳丘を築くのが一般的であったといえる」（註3）とされているが、その千葉県でも火葬墓総数115基（内石櫃33基）のうち、マウンドを伴っていたのはわずか2基であることを考えると、やはり特殊な例であるといえるのではないだろうか。また、「終末期の方墳から継続的に築造されている」方形区画墓の埋葬施設が火葬墓である例もあるが、これは8世紀以降のものであり、全体数も10基以下ということを見れば、古墳時代の影響下にあるものとは考えにくい。

恐らく、マウンドは古墳時代の名残であり、群馬県での出土が増える頃になると、古墳という前代の葬制を受け継ぐことはなくなっていたため、出土数に対してマウンドを伴うものが少ないと考えられる。

次に後方斜面についてであるが、これは類例が全くない。先に挙げた4例はいずれも緩斜面、もし



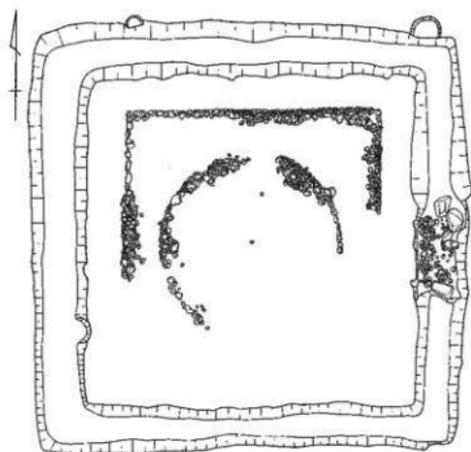
第10図 千葉県 江川熊野神社境内遺跡 略測図（文献1より転載）

くは尾根の最頂部に位置しているため、後方に斜面は存在しない。

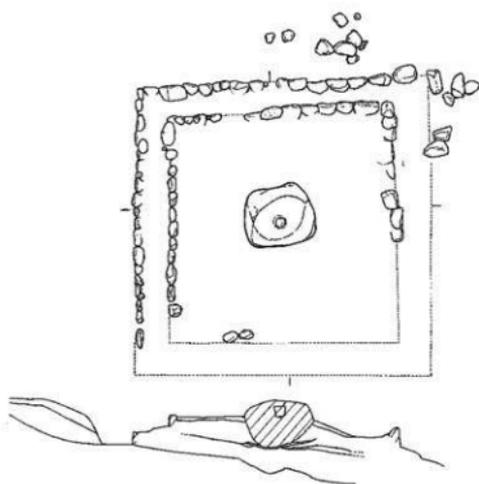
この光明寺3号墓の立地は、当初より、火葬墓というよりはむしろ終末期古墳に近い、との指摘を受けていた。また、これは唐代に流行した「風水思想」(註4)に基づき、墳墓地が選定されたとも考えられる。

続日本紀に、庚子4年(西暦700年)僧道照が死亡した際、火葬されたことについて、「天下の火葬此より始まれり」という記述があり、(文献1)これが国内での最初の火葬といわれている。

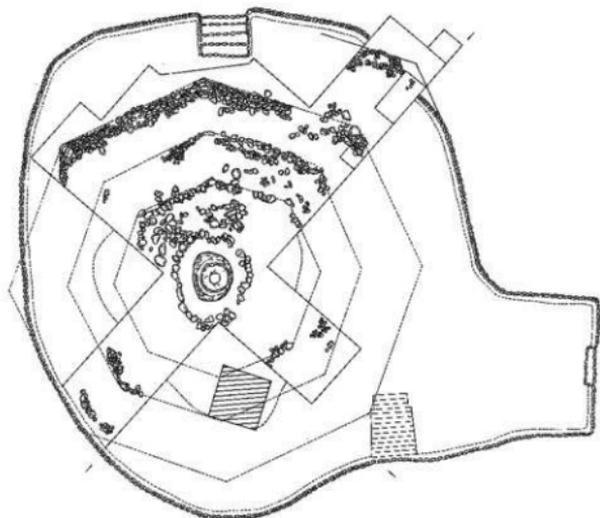
しかし、この火葬の始まりについては道照を国内での火葬の期限とする説には疑問視する声もあり(註5)、確実な例として「700年前後の時期に出現する」(文献3)とするのがやはり妥当であろう。14C年代測定法での測定結果についても、670年±50という結果が出ていることから、いずれにせよ、マウンドを伴う石製骨蔵器(石櫃)は古墳時代の葬制と火葬という風習が日本に取り



第11図 静岡県 清水柳北1号墳(文献5より転載)



第12図 岡山県 唐臼墳墓群(文献4より転載)



第13図 群馬県 武井鹿寺跡

入れられてから間もない、時期的には7世紀の終わり頃から8世紀初めの、いわば移行期の火葬墓であると位置付けられる。

註1 中村唯史氏の御教示による。

註2 どちらの遺跡についても開発途中での発見であり、また発見された年がかなりさかのぼるため、簡単なスケッチ程度の記録しか残されていない。

註3 「房総考古学ライブラリー6 古墳時代2」の記述による。

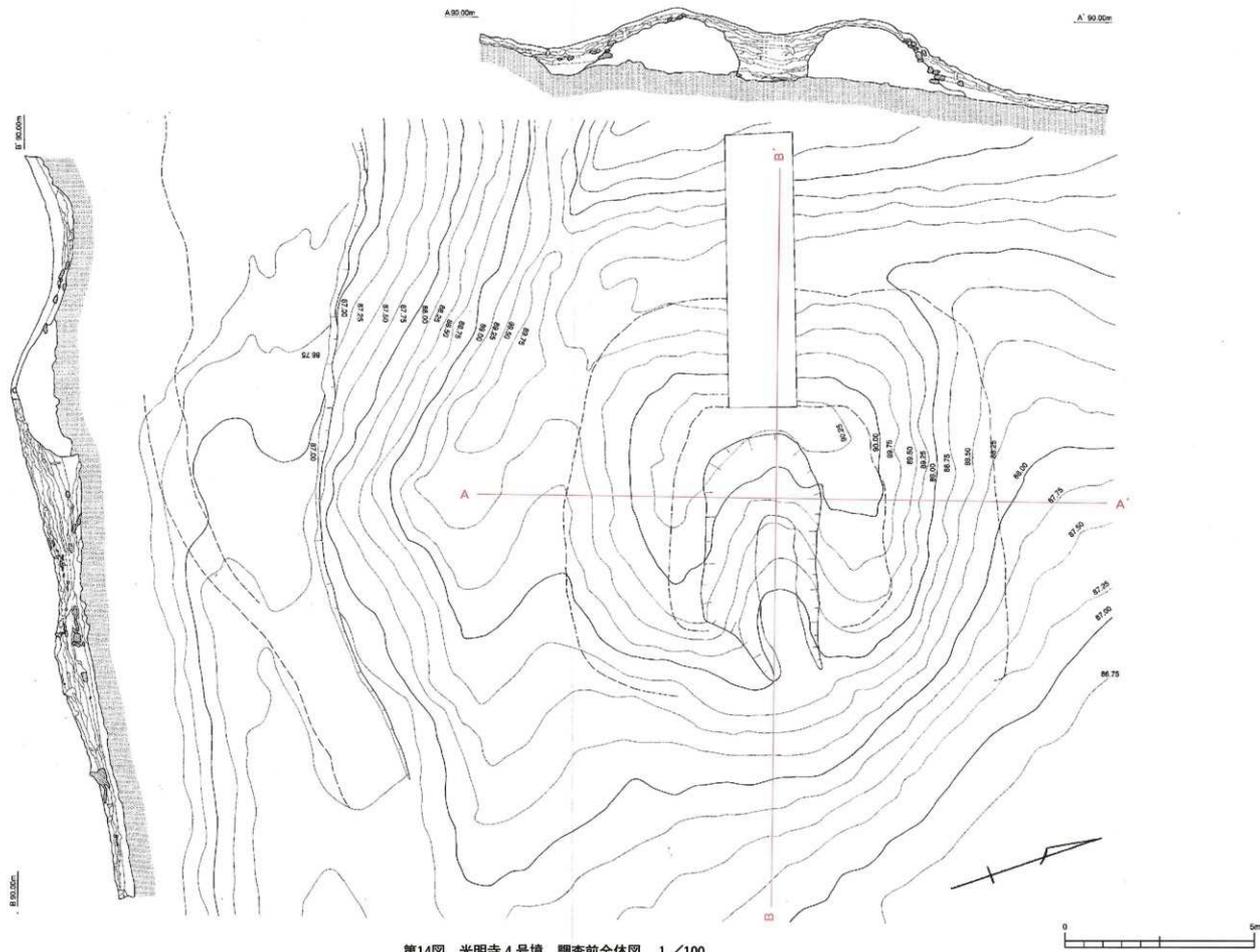
註4 「風水思想」とは、唐代の大陸でも流行していた思想で、墳墓を造るにあたり、後ろに山を負い、左右に丘陵を擁し、全面に平地流水を臨み、「藏風得水」に適応した地形を選定する思想である。

註5 大織冠伝の最古の抄本に、藤原鎌足が670年に死亡した際に「火葬」したとの記述がある。また、大宝令に丁匠が往還の途中で死亡し、家の者が取りに来られない場合は「焼之」とあるの

で、これらはすでに火葬の方法が知られていた証拠であると言われる。しかし、大織冠伝は誤写である可能性もあるため、最初の火葬がいつか、と言うことははっきりとはしていない。

文献

1. 「東日本における奈良・平安時代の墓制」—墓制をめぐる諸問題—
第5回東日本埋蔵文化財研究会
2. 「続日本紀」巻第一
3. 「近畿における8・9世紀の墳墓」黒崎 直 国立奈良文化財研究所研究論集 VI
4. 「岡山県史・考古資料」
5. 「清水柳北遺跡発掘調査報告書 その1. その2」 沼津市文化財調査第47. 48集
沼津市教育委員会

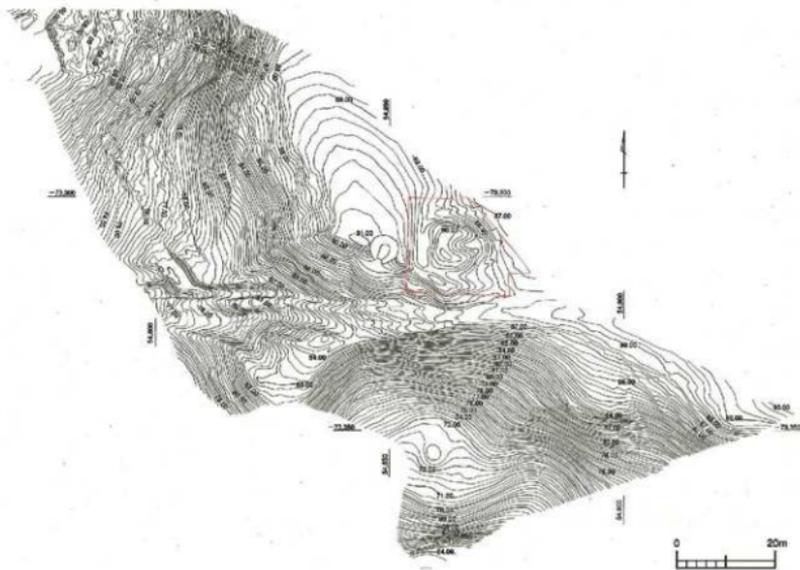


第14图 光明寺4号墳 調査前全体図 1/100

光明寺4号墳

1. 立地

光明寺4号墳は、出雲市上塩冶町の神戸川右岸、標高約90mの丘陵上に存在する。この場所は神戸川が出雲平野に流れ出る場所にあたり、出雲平野を一望できる上、浜山まで見通すことができる。また、南方を望めば刈山古墳群、王院山をみることができる。詳細は位置と環境の項に譲るが、この一帯は上塩冶横穴墓群が分布しているほか古墳時代後期から終末期にかけての古墳も多く発見されており、この時期における一大墓域であったと考えられる地域である。



第15図 周辺地形測量図 1/1000

2. 調査前の状況

光明寺4号墳は、平成8年度の試掘調査の際に発見されている。発見当初より方墳であることが予想されたが、念のため試掘トレンチを西側斜面に設定した結果、トレンチ内からは外濠列石が検出され、古墳であることが判明した。このため、平成10年度に本調査を行うこととなった。

調査前より、地形からは南側及び西側には周壕があると考えうる状況であった。また、墳丘中央から東側にかけて大きくくぼんでいたため、その規模から内部主体は横穴式石室であり、盗掘による石室の崩壊が予想された。

3. 発掘調査の成果

まず初めに調査前墳丘測量を実施した。(第14図) その測量成果を元にして、古墳を十字に切るラインを設定し、土層を確認するためサブトレンチの掘削を開始した。表土は約10cm~20cm程であり、この表土の下には褐色土の墳丘面が現れたため、この面を追って、調査区全体を広げていった。

墳丘

光明寺4号墳は1辺約10mの正方形を呈する方墳である。外部施設として外護列石を持ち、墳丘高は現状で2m程である。築造当時の高さについては今では知る術がないが、外護列石の残存状況より、現状よりも高くまで墳丘が盛られていたことが考えられる。また、墳丘は二段築成と考えられ、標高90m付近でテラス状の平坦面を造っている。ただし、現状では墳丘上面盛土の流出があり、特に東半分についてはそれが激しい。

調査前において墳丘築造方法については、その立地する地形の状況より自然地形を利用してある程度削りだし、必要部分についての盛土を施したと考えた。しかし、墳丘断ち削り状況より、実際は墳丘のほとんどが盛土であることが判明している。

外護列石

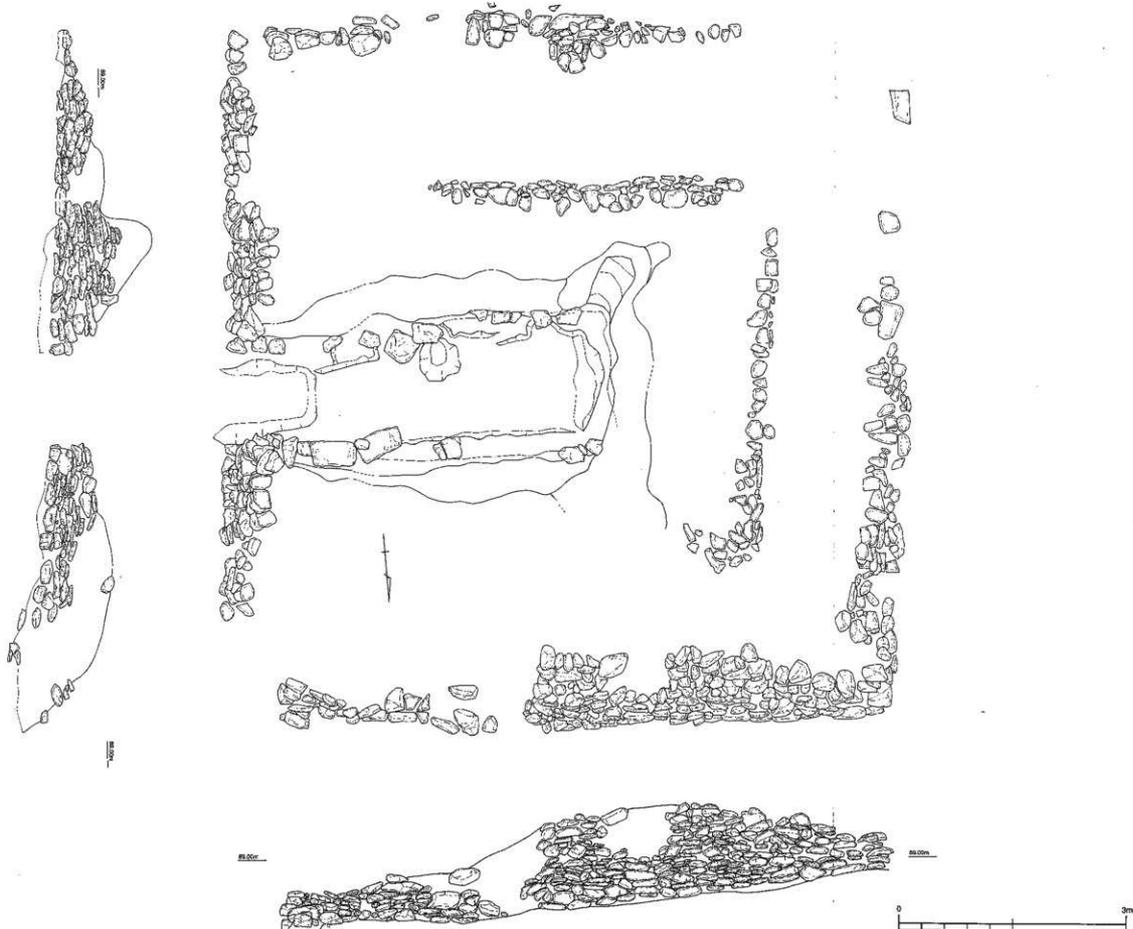
墳丘全体に流紋岩の割石を利用した外護列石を巡らしている。この流紋岩は光明寺3号墓の葺石と同様の石を利用している。いわゆる葺石とは違い、石垣状に石を積み上げるといった構造であり、北側の高いところでは1.5mもの高さにも至る。この北側には転石がほとんど認められず、ほぼ築造当時の様子を残していると思われる。他の3方については周壕内に多くの転石が見られ、現位置を留めている外護列石も比較的少ない。また、2段築成のテラス部分を水平に造る意図があるために、地山の高い南西部にいくにつれ外護列石を積み上げる高さは低くなっているようである。

また、本古墳の北西約200mに位置する三田谷3号墳においても同様の外護列石が見られる。周辺他の古墳については墳丘の残存が非常に悪いものがほとんどであり、外部施設の状況はよくわかっていないが、同時期における外部施設のあり方の1つとして外護列石を巡らせる手法が採用されていたのであろう。

周壕

墳丘の南側及び西側には周壕がめぐる。この周壕は幅1m~2m、高さ1m程の規模である。床は平らに整形されているため周壕の断面形は逆台形を呈し、地山を削り出して造られている。

周壕は南西部の一番高い場所より低い方へ向けて掘られており、墳丘北西部及び南東部に達するにつれ徐々に浅くなり、なくなってしまう。このため、周壕は排水の機能を果たしていたと考えられる。また、墳丘の見かけの高さを確保する意味もあったであろう。

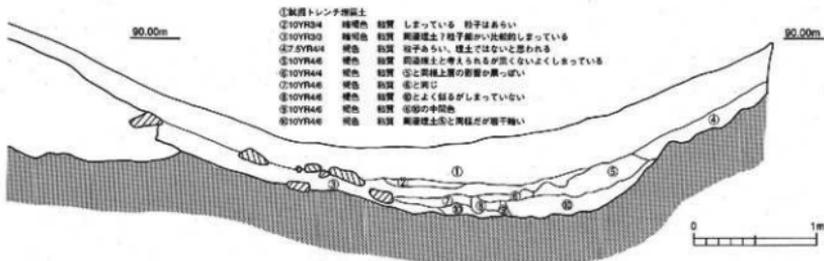


第16圖 外圍列石出土狀況 1/50

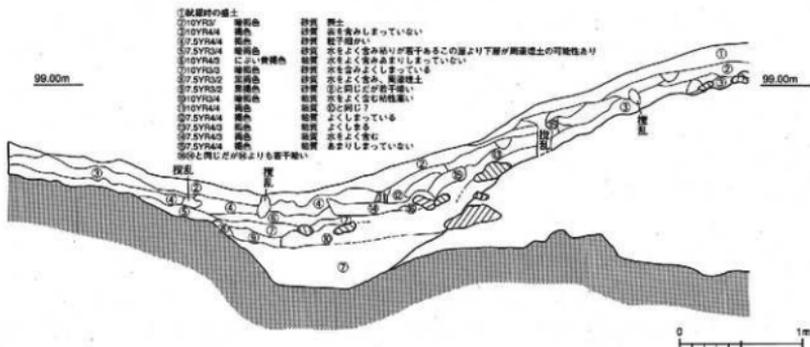
周壕内土層堆積状況 (第17・18図)

周壕内の埋土は地山面直上に厚さ最大35cmの黄褐色土が堆積しており、この層は非常に良くしまっている。この上層には暗褐色土の堆積が見られ、墳丘東側の同様の層からは鉄製品が出土している。

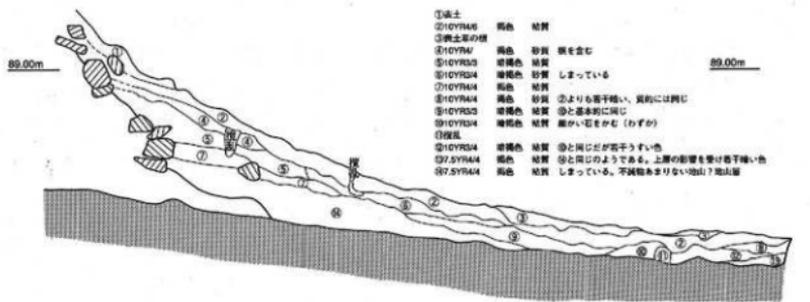
また、転石はこれらの黄褐色土層から暗褐色土層にかけて含まれている。これらのことから、黄褐色土層は盗掘時に墳丘を破壊した際の排土である可能性が考えられる。黄褐色土層は地山面直上であることから、被葬者埋葬後、あまり時間のたっていない時期に盗掘がなされたようである。暗褐色土層は調査区全域から確認でき、この面での一時的な堆積の停止が考えられる。



第17図 東側周壕内土層堆積状況 1/40



第18図 南側周壕内土層堆積状況 1/40



第19図 北側表土堆積状況 1/40

内部主体（横穴式石室）（第20図）

内部主体はかなり崩壊しており、凝灰岩の切石数点が残るのみであった。主体部の平面プランや、東側の外護列石から墳丘中心部へと続いていく凝灰岩切石の存在より、内部主体は凝灰岩切石を利用した無袖型の横穴式石室であることが推定できる。

検出した床面では、両端の側壁の乗っている場所よりも2～3cm低く加工されている。床面が土や礫床のようなものであれば、側壁が倒れないように石材を入れ込むための堀方を設ける必要があるため、三田谷3号墳の例のように築造当時は比較的厚い石を床面に敷いていたと考えられ、床石が側壁を支えるための機能も果たしていたのであろう。

また反対に、奥壁にあたる部分にだけは堀方が認められる。これは、奥壁は側壁に比べ大きな石を利用したことが墳丘断り土層堆積状況からも推測でき、床石だけでは奥壁を支えきれない危険性があったために堀方を設け、石材の基部を埋めたものと考えられる。

この堀方は玄室部分の幅いっぱいには設けられていないため、奥壁は側壁に挟まれていたと考えられる。この構築方法は周辺の古墳に一般的に用いられる手法である。

先にも述べたとおり内部主体には石室石材の残存が少ない。さらに、墳丘外にも石材は散乱しておらず、石室の石材は盗掘時にどこかへ運び去ったと考えられる。それを示すのが25層である。この層は凝灰岩チップの堆積層であり、地山面のすぐ上に堆積しているため、この層の時期において石材は抜き取られたと考えられる。ただ石材を抜き取るだけでは凝灰岩のクズがこんなにも厚く堆積しないと思われるため、搬出の際にある程度の加工もこの場所で行われたのかもしれない。

入り口から約1m付近までは側壁の1段目に凝灰岩切石を用い、その上には外護列石と同様の割石を積み上げている。また、側壁の一部として割石を使用する場所までは、床面が石室奥側よりも一段低く加工されている。このことや通常、石室の玄室部分は凝灰岩切石だけで構築されている例が多いため、この段は墓道と玄室の区切りを意識している可能性がある。

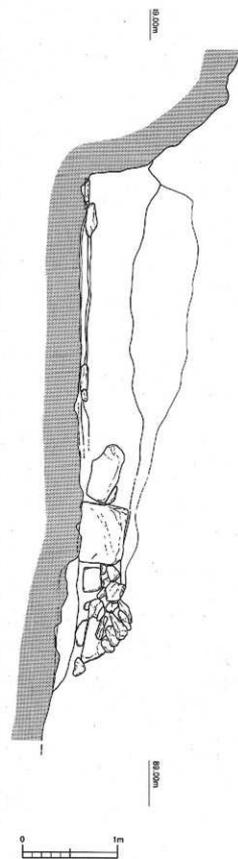
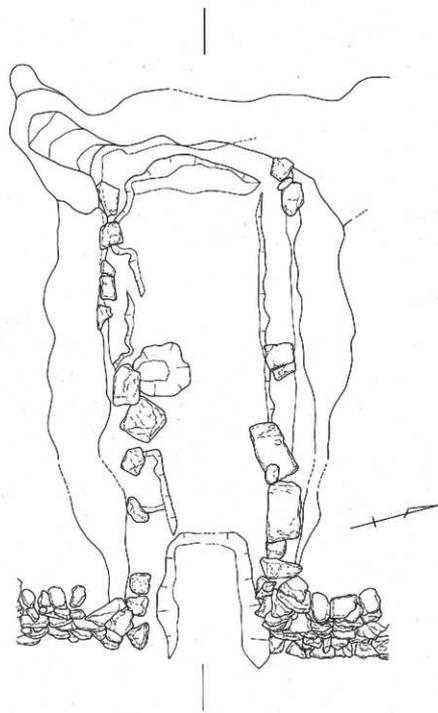
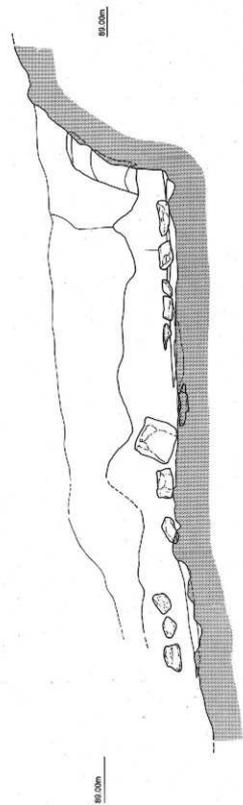
横穴式石室内土層堆積状況（第21図）

横穴式石室内の土層は非常に整然とした堆積状況を示している。

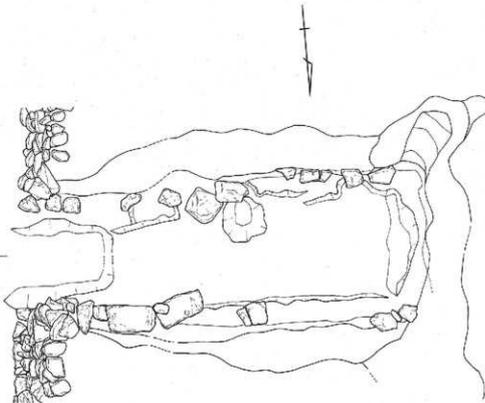
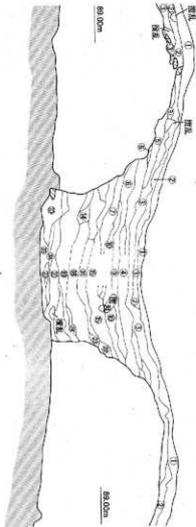
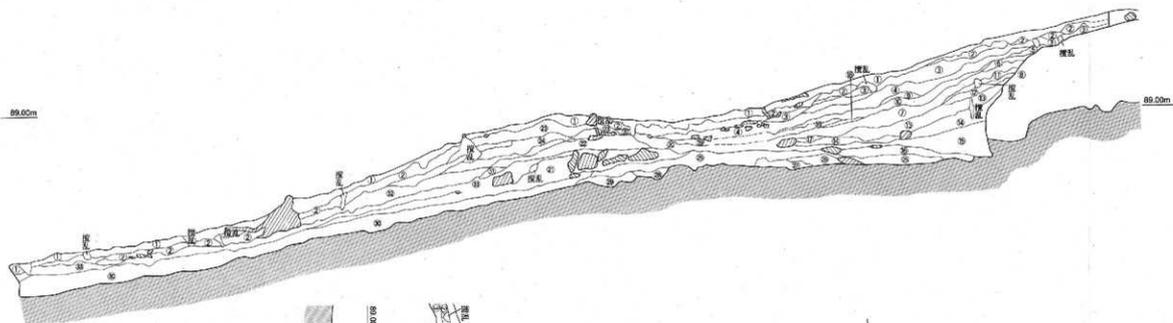
床面直上には厚さ20cm程の凝灰岩チップ層が全面に堆積している。この層は残存している石室石材の下には堆積しておらず、石室外にも見られることから、盗掘時における面であることが推定できよう。

この凝灰岩チップ層の上面には調査区全面に見られる暗褐色土層が堆積し、盗掘後埋め戻すことなくそのままになっていたようである。

暗褐色土層から表土までの間では特に人の手が入ってはいないようであり、盗掘後、自然に埋まっていたと考えられる。

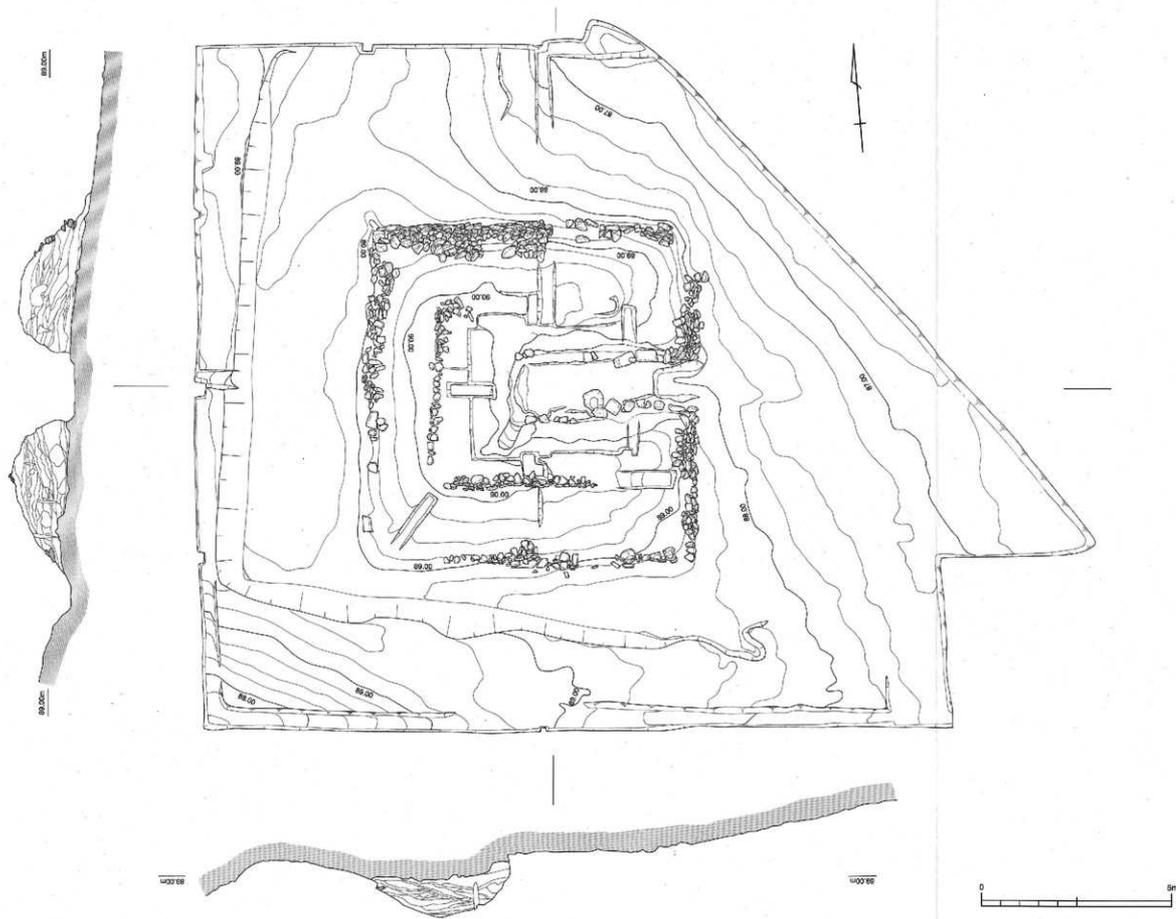


第20図 内部主体実測図 1/40



- ①10YR 4/4 褐色 根を多く含む
- ②10YR 4/6 褐色 粘質 よくしまっている 根を多く含む
- ③7.5YR 4/4 褐色 粘質 よくしまっている 根を若干含む
- ④10YR 4/4 褐色 粘質 あまりしまっていない 水を若干含む
- ⑤10YR 4/6 褐色 粘質 ②③と比べしまっていない 水をよく含む ②③よりも粘っぽい
- ⑥7.5YR 5/6 明褐色 粘質 しまっている 腐丘状粘土
- ⑦10YR 4/6 褐色 粘質 あまりしまっていない ②よりも白っぽい、黒色ブロック若干含む 腐方粘土と考えられる
- ⑧10YR 5/4 にぶい 黄褐色 粘質 しまりなし
- ⑨7.5YR 5/6 明褐色 粘質 しまりなし
- ⑩7.5YR 5/4 にぶい 褐色 粘質 若干しりがある
- ⑪7.5YR 5/8 明褐色 粘質 しまりなし
- ⑫7.5YR 4/6 褐色 粘質 しまりがある
- ⑬7.5YR 5/4 にぶい 褐色 粘質 しまりがある 炭化物若干含む
- ⑭7.5YR 5/6 明褐色 粘質 しまりなし
- ⑮7.5YR 4/6 褐色 粘質 しまりなし 若干異味がかかる
- ⑯雑層 (凝灰岩チップ層)
- ⑰7.5YR 4/4 褐色 粘質 しまりなし
- ⑱7.5YR 4/4 褐色 粘質 しまりある
- ⑲7.5YR 5/4 にぶい 褐色 粘質 少し凝灰岩粒子含む
- ⑳7.5YR 4/4 褐色 粘質 凝灰岩のくずれたもの多く含む
- ㉑10YR 4/6 褐色 粘質 しまりある 凝灰岩チップわずかに含む
- ㉒10YR 3/4 暗褐色 粘質 凝灰岩チップ若干含む
- ㉓7.5YR 4/4 褐色 粘質 凝灰岩多く含む
- ㉔10YR 4/6 褐色 粘質 しまりある
- ㉕7.5YR 5/6-4/6 明褐色-褐色 粘質 しまりなし 凝灰岩チップ含む
- ㉖10YR 4/6 褐色 粘質 しまりある 糖多く含む
- ㉗10YR 4/6 褐色 粘質 しまりある 凝灰岩チップわずかに含む
- ㉘7.5YR 4/6 褐色 粘質 しまりある 凝灰岩チップ多く含む
- ㉙7.5YR 4/4 褐色 粘質 しまりある ㉖と同じであるがチップ少ない
- ㉚10YR 4/6 褐色 粘質 しまりある ㉖と同じと考えられるがチップ少ない
- ㉛10YR 4/3 暗褐色 粘質 ㉖と一連のものか? 凝灰岩チップ含む
- ㉜10YR 4/4 褐色 粘質 凝灰岩チップ含む 炭化物含む
- ㉝10YR 2/3 濃褐色 粘質 しまっている 旧灰土 (遊揚前)
- ㉞7.5YR 4/6 褐色 粘質 しまりなし 炭化物含むチップ若干
- ㉟7.5YR 5/6 明褐色 粘質 しまりある 凝灰岩少ない

第21図 石室内埋土堆積状況 1/40



第22図 光明寺4号墳 調査後総括図 1/100

出土遺物 (第23図)

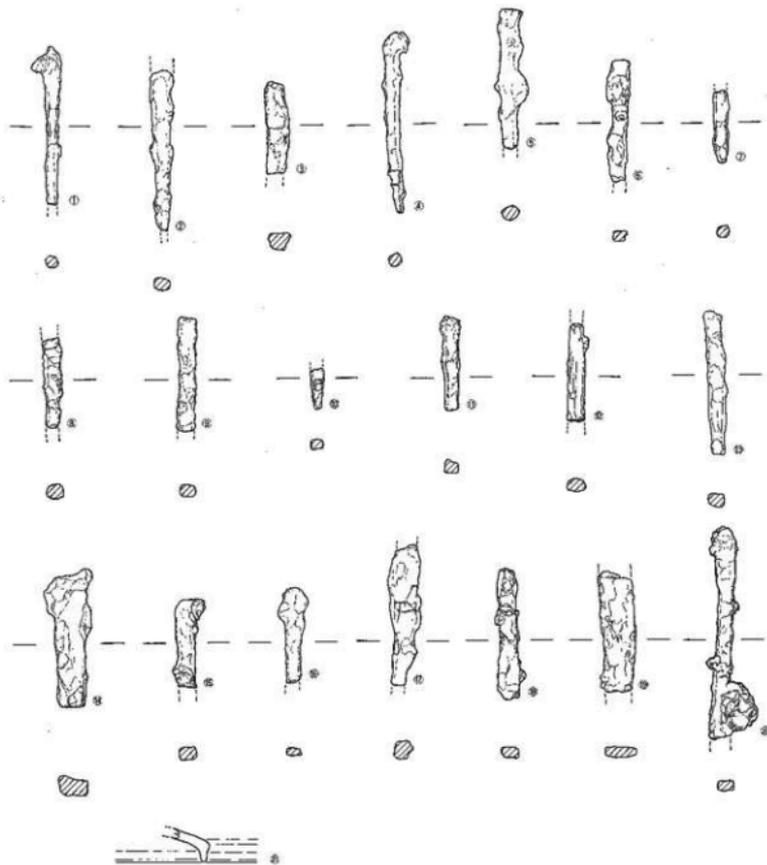
光明寺4号墳からの出土遺物はきわめて少ない。

(土器)

周壕内からは風化の著しい土師器片が数点出土した。また、墳丘外より土師器片及び須恵器片が出土している。この中で唯一時期を知ることができるのは墳丘頂部の表土中より出土した須恵器片である(23)。これは口縁部が下へ折れ曲がるタイプの須恵器坏壺であり出雲8期の様相を示す。

(鉄器) (1)~(23)

墳丘の東側、内部主体の入り口外からは鉄器の出土が多く見られた。これらの鉄器は鉄鍍及び鉄釘の破片と考えられ、黒褐色土中より出土するため、盗掘時に掻き出されたものと考えられる。



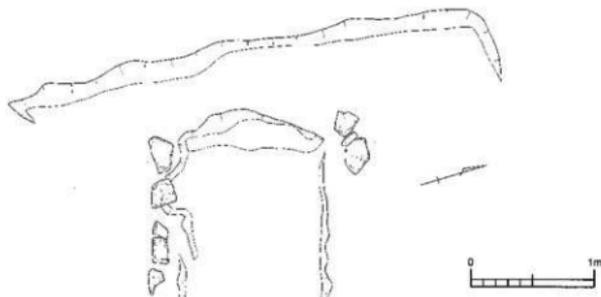
第23図 出土遺物実測図 1/2

墳丘断ち割り土層堆積状況（第25図）

墳丘の構築状況を把握するために墳丘の断ち割りを実施した。その結果、墳丘のほとんどが盛土によって構築されていることが判明した。明褐色土と暗灰褐色土の互層で形成されている。また、土層の堆積状況の不整合面より最大5回の盛土が実施されていることがわかる。この状況より石室・墳丘の築造過程を復元することが可能である。この築造過程については後に述べる。

完掘状況（第24図）

墳丘断ち割りトレンチを入れたときに、墳丘下より加工段が確認できたため墳丘の全てを除去して地山面の確認を実施した。加工段は主に西側に認められ、内部主体の構築予定地を平らに加工するために設けられたものである。



第24図 地山加工状況 1/40

4. 小結

光明寺4号墳は現状で約2mの高さを持つ古墳であるが、2段目外護列石の残存状況や盗掘による墳丘の破壊及び流出等を考えあわせると、現在よりも高さがあったと考えられる。

光明寺4号墳の時期

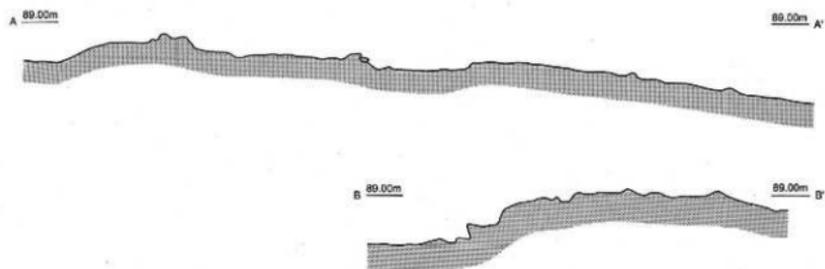
時期を明確に示すような遺物の出土が見られないため、光明寺4号墳の築造年代を比定するには非常にデータが少ないが、凝灰岩の切石を利用した無袖型の横穴式石室を主体部とすること、墳丘の規模が1辺10mと大きくないこと、石垣のような外護列石をめぐらせることより、7世紀代の古墳であることが考えられる。ただし、普通、7世紀代の古墳は南側に開口するという特徴を持つものに対し、光明寺4号墳は東側へ開口している。これは立地場所が南側、東側が他の2方よりも高く、石室の高さを確保するためには低い方へ開口するように築造しなければならない地形的制約があったためと考えられる。

しかし、光明寺4号墳の西側にはもっと高い場所があり、なぜこの場所でなければならなかったのかという疑問が残ることを指摘しておきたい。

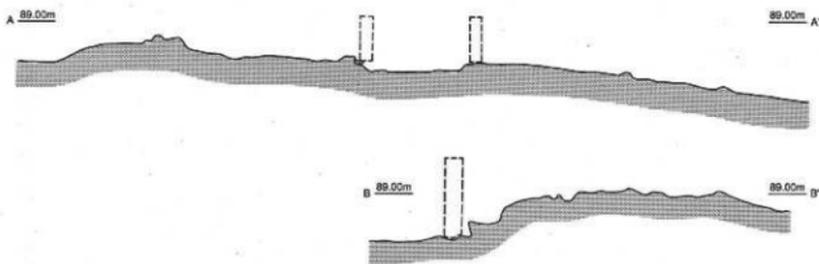
本古墳が7世紀代の古墳とするならば、現状での墳丘頂部表土中より出土した須恵器片の問題が出てくる。須恵器片の時期は出雲8期であり、この時期は古墳よりも時期が下ってしまうため、盗掘時において混入したものと考える方が自然であろう。

光明寺4号墳の築造過程（第26図）

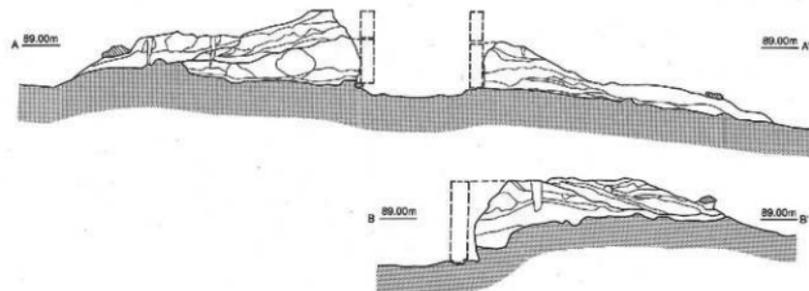
調査の結果、本古墳の築造過程をある程度復元することが可能であるため、報告しておく。



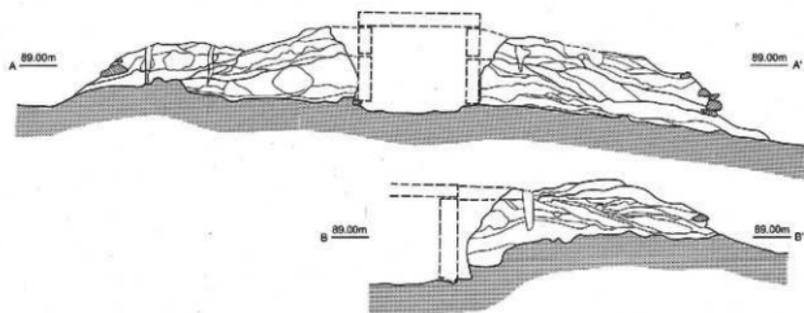
- ① 現地形の斜面を加工し周壕及び横穴式石室部分を平らにする。検出状況から見ると、当該地は元々より比較的平らであり、墳丘基底部分近より西側に向かって急に高くなっていったと考えられる。



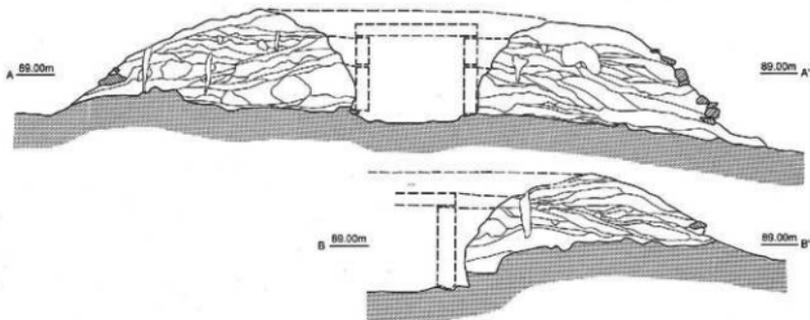
- ② 側壁を立てる部分に割石を置き、その上に凝灰岩の切石を置く。また、石室の奥の床面を掘りこんで、その中に奥壁を立てる。



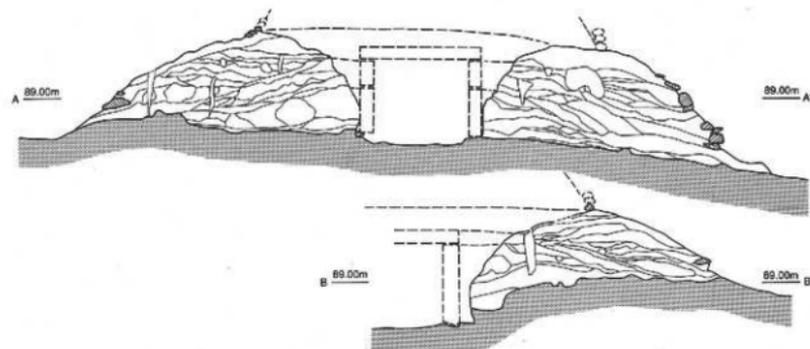
- ③ 壁面が倒れないように裏へ土を盛る。この時に外護列石の基底石を設定する。



- ④ 外護列石を積みながら、段階を踏んで墳丘を盛っていく。



- ⑤ 1段目外護列石の積み上げが終了した90m付近で一度平らにしテラスを造る。



- ⑥ 2段目外護列石を積み上げ、さらに墳丘を盛る。

本古墳は光明寺古墳群の一角に存在している。光明寺古墳群には、古墳時代後期と考えられる1号墳、石棺式石室の影響が多分に見られる2号墳、墳丘を持つ火葬墓の3号墓と数は少ないながらも、6世紀後半から8世紀に至るまでの墳墓が連続してつくられている。神戸川の対岸には42基からなる刈山古墳群もあり、古墳の終焉の様子を捉えることができるようになったのではないだろうか。

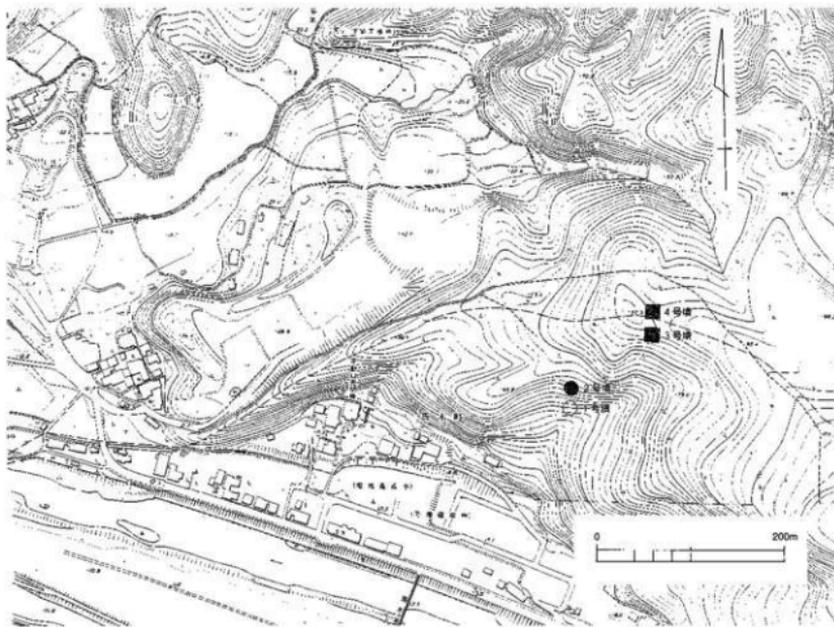
特に、これまで出雲平野の古墳時代終末期古墳の調査例は非常に希少であったが、近年、斐伊川・神戸川放水路建設に伴う発掘調査によって、調査例が増加しつつある。しかし、墳丘はほとんど失われている状況であり、横穴式石室の一部を残すだけといった例が大半である。光明寺4号墳は横穴式石室の残存は非常に悪い状況であったものの、外護列石及び周濠の残りは非常に良かった。特に、1段目の墳丘のほとんどが残っていることで、墳丘の築造過程を復元することも可能となったことにこの調査の意義を認めたい。また、光明寺4号墳が出雲平野における古墳時代終末期の墓制の解明に一石を投じる資料となることに期待したい。

光明寺古墳群と上塩冶地域の後・終末期古墳

I 光明寺古墳群

光明寺古墳群は神戸川が出雲平野に流れ出す付近の右岸丘陵上に位置している、3基の古墳と1基の古墓とで構成される古墳群である。以前より1号墳、2号墳、3号墳（当初は古墳とされていた。）が知られており、4号墳については平成8年度の試掘調査によって、その存在が明らかとなった。

付近には古墳時代後期における首長墓と考えられている上塩冶築山古墳、地藏山古墳や約180基からなる上塩冶横穴墓群、さらに神戸川の対岸には42基からなる刈山古墳群が位置しており、古墳時代後期から奈良時代にかけての墳墓が密集している地域である。



第27図 光明寺古墳群 分布図 1/5000

1. 古墳各説

1号墳

光明寺古墳群の中でも一番低い位置に築造されている。現在では消滅しており、その石材の一部を残すのみである。

墳丘は流出により詳細は不明であるが、自然石を用いた横穴式石室を持つ。出土遺物としては須恵器坏及び甍片が出土している。横穴式石室は小型であり自然石を用いることから、時期としては古墳時代後期後半が与えられ、後述する2号墳よりはやや古いと考えられよう。

2号墳

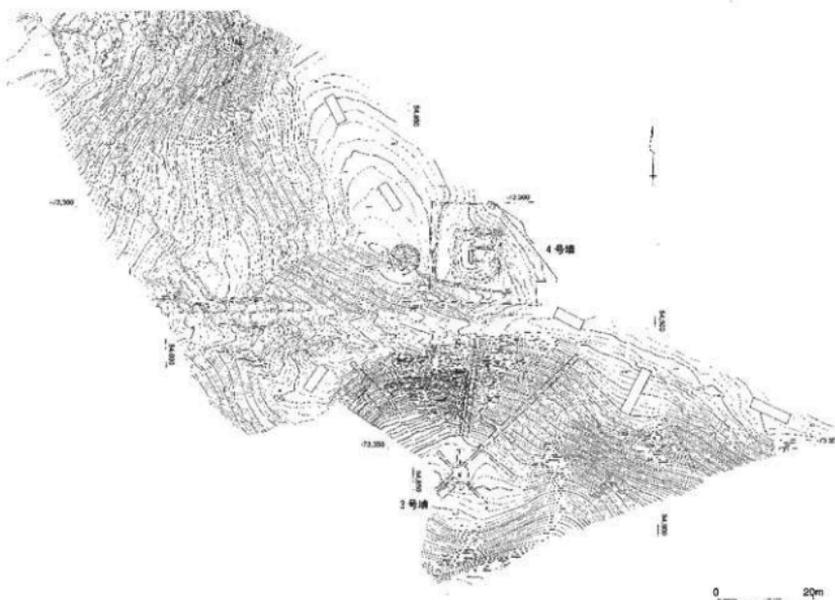
1号墳の上方の丘陵斜面上に位置する小規模な古墳である。凝灰岩の切石で構成された非常に精美な横穴式石室を持つが、墳丘の多くは流出しており規模、墳形は不明である。また羨道より外方の部分については崩壊と流入土のため詳細は不明であるものの、玄室には流入土がほとんどなく概要を把握することができる。

玄室は長さ2.0m、幅1.6m、高さ1.7mを測り、奥壁、側壁、天井とも1枚の凝灰岩切石で構成される。また、数個の凝灰岩切石を敷き床面としている。玄門は袖石を立てその上に楣石を置いて造られており、側壁にはこれらや奥壁を組み合わせるための加工が施されている。

これらのことより、この横穴式石室は石棺式石室の影響を受けていると考えられ、築造年代は古墳時代後期後半以降、1号墳よりも若干新しいと考えられる。

3号墓

当初は古墳と考えられていたものであるが、調査の結果、一辺7.5mの方形を呈するマウンドを持つ火葬墓であることが判明した。その北側斜面からは多くの石が検出されており、マウンドの後方斜面として人工的に加工されたものと考えられる。また、内部主体としては1辺75cmの正方形の石製骨蔵器が直葬されており、この中に火葬骨が納められていた。この火葬墓は古墳の要素を色濃く残していると思われ、築造年代としては8世紀初頭が考えられる。詳細は本書で報告しているので省略する。



第28図 光明寺 3号墓・4号墳 測量図 1/1000

4号墳

今回の調査で新たに発見された古墳である。1辺約10mの方墳であり、周りに外護列石を積み上げている。内部主体は破壊されているが、凝灰岩切石が残っていることから、これらを石材とした横穴式石室が考えられる。築造年代としては外護列石が認められることから古墳時代終末期（7世紀代）が考えられる。詳細は本書で報告している。

2. 光明寺古墳群の築造時期について

光明寺古墳群はわずか4基からなる古墳群であるが、その推定築造時期をみると6世紀後半（古墳時代後期後半）から8世紀初頭にかけて連続していることがわかる。その築造順は次のとおりである。

1号墳→2号墳→4号墳→3号墓

この連続した築造時期は古墳の終焉や火葬の始まりといった墓制の画期をまたいでおり、これらの様子を窺い知る良い資料である。

3. 立地について

光明寺古墳群では丘陵の斜面にほぼ直交するように高さを変えて、一直線に古墳・古墓を築造している。古墳の立地としては1号墳が丘陵の中腹、2号墳がその若干上方、4号墳が丘陵の根尾上に位置している。資料数は少ないものの光明寺古墳群においては時期を追って高所へ築造する傾向がみられ、古墳時代終末期に向かうにつれて、高所へ築造することに意義があったのではないだろうか。ただし、3号墓は4号墳の下方に位置しており、これに関しては高所に築造するよりも後方斜面を造り出すことに意味を持っていたのではないかと思われる。

光明寺古墳群では3基の古墳、1基の古墓が確認されているが、これらの立地する丘陵は非常に広く、神戸川対岸にある刈山古墳群の築造数も考えると4基のみであるとは考えにくい。そのため、この丘陵上には相当数の未確認の古墳があると考えられ、今後はこれらの存在を確認してみる必要がある。また、上塩冶横穴墓群に隣接するといった地形的要素を考えれば、横穴墓の埋没している可能性も考えられよう。

II 上塩冶地域における後・終末期古墳文化

上塩冶地域には古墳時代後期から終末期にかけての古墳が密集している。6世紀中頃に築造された半分古墳、首長墓として今市大念寺古墳に続くと考えられる上塩冶築山古墳、地藏山古墳といった大型古墳が築造される一方、小規模な古墳や横穴墓も築造されるようになる。その後、古墳時代終末期に入ると上塩冶横穴墓群が最盛期を迎えるため、これまでは古墳時代終末期の墓制は横穴墓が主流であり、墳丘を持った古墳はあまり築造されないというように解釈されてきた。しかし、近年、斐伊川放水路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が進むにつれ後・終末期古墳の調査が増加し、上塩冶地域における後・終末期古墳文化の様子がほんやりとはあるが見えてきたように思われる。

そこで、この項では上塩冶地域の後・終末期古墳文化を考えてみたい。

1. 上塩冶地域における後期古墳

①三田谷1号墳

横穴式石室を持つ古墳であるが、後世の攪乱により多くが破壊されている。墳形は残存していた墳裾の様子より円形を呈していると考えられ、復元すると径14mになる。横穴式石室は自然石と凝灰岩切石とで構成されているようである。出土遺物は須恵器坏身、壺片、碧玉製丸玉が認められており、古墳の時期としては須恵器の坏身から、出雲4期が推定できる。

②三田谷2号墳

平成8年度に島根県教育委員会において調査が実施されている。

上塩冶横穴墓群第33支群よりつながる丘陵上、南西へ約15m程離れた位置に立地する。標高26m付近であり、丘陵頂部より若干下がった場所に築造されている。墳丘規模は約7m(復元)の方墳であり、内部主体は凝灰岩を用いた横穴式石室である。石室前方及び溝内より須恵器等、遺物の出土が見られ、この古墳が築造されたのは出雲3期から4期であると考えられる。

③三田谷3号墳

平成10年度に出雲市教育委員会において調査を実施している。

この古墳は上塩冶横穴墓群第19支群の北側約15mに位置する1辺約5.5mの方墳である。この古墳には、凝灰岩切石で構成された横穴式石室が構築されていた。外部施設として方形に巡った葺石が認められている。地山削り出しによって築造されており、尾根の頂上ではなく、若干下がった位置に立地している。

墳丘側には須恵器の大甕が出土しており供献の行われた可能性が高い。墳丘外ではあるものの出雲6期の須恵器坏蓋が出土しており、横穴墓群とはほぼ同時期に築造されたと考えても問題ないと思われる。

④三田谷4号墳

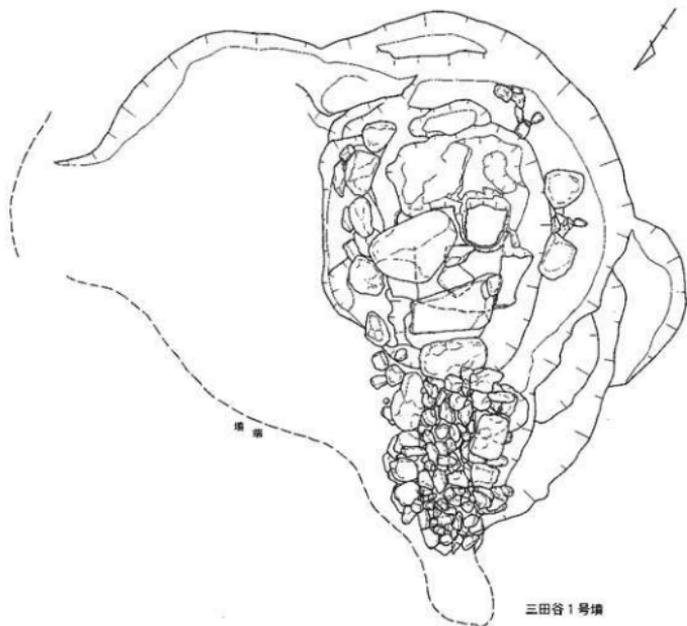
平成10年度に島根県教育委員会によって調査が実施されている。

墳丘の多くは既に失われており、外部施設も確認されていない。しかし、内部主体として天井部分が残存していないものの凝灰岩の切石で構成された幅1.1m、長さ4.2mの横穴式石室が発見されている。また、この横穴式石室には有縁石床の一部が検出された。出土遺物としては玄室内から金環、鉄刀、須恵器が出土している。

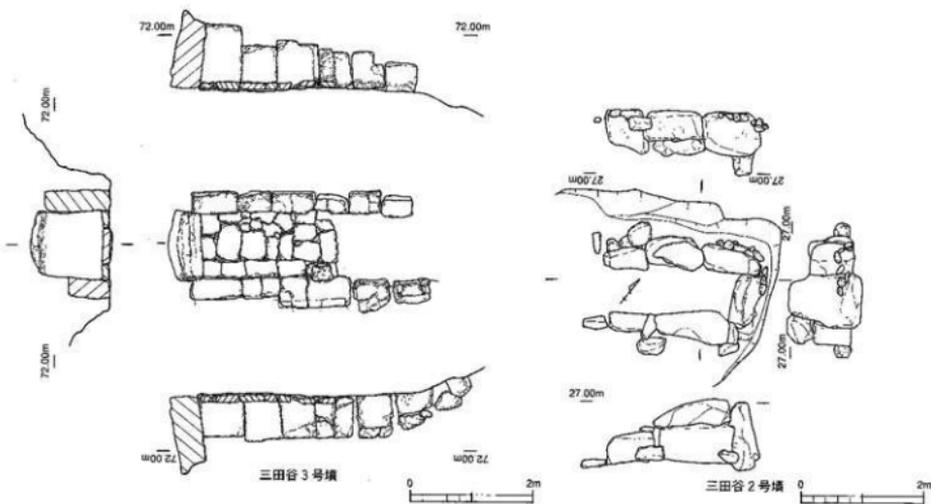
⑤三田谷5号墳

三田谷4号墳とともに平成10年度に島根県教育委員会によって調査が実施されている。

三田谷4号墳の東側20mに位置する古墳である。この古墳の墳丘及び内部主体はほとんどが失われており、凝灰岩切石の右側壁3枚と床石の一部が残るのみである。なお、石室付近の攪乱部分よりは金環の出土がみられる。



三田谷1号墳



三田谷3号墳

三田谷2号墳

第29図 後・終末期古墳 石室実測図① (各報告書より転載。一部改変。) 1/80

⑥大井古墳

平成8年度に鳥根県教育委員会によって調査されている。

この古墳は上塩冶横穴墓群第7支群の南東約30mの場所に位置している。墳丘規模は東西6.2～7.0m、南北は推定で5.2mを測り、墳形は方墳と考えられるが、北側がやや狭いために正確な長方形を呈してはいない。なお、石室の北側、東側からは周壕が確認されており、また、南側以外では円礫を用いた外護列石が検出されている。石室は奥壁、側壁各1枚で構成される型式のものである。出土遺物としては須恵器壺・蓋坏などがあり、それらは出雲6期の様相を呈している。

⑦狐廻谷古墳

平成8年度に鳥根県教育委員会により調査されている。

工事中発見のため、凝灰岩切石で構成された幅1.2mの横穴式石室が一部残存しているのみである。奥壁と側壁の左右1枚ずつ及び床石を若干残存している。奥壁は2枚を横に並べて構成されており、側壁を受けるための削り込みが施されている。墳丘としては石室側壁から東側へ向かって1.5m程残存しているのみであり、墳形は不明であるものの墳丘規模は推定で4.6m程である。

⑧光明寺1号墳

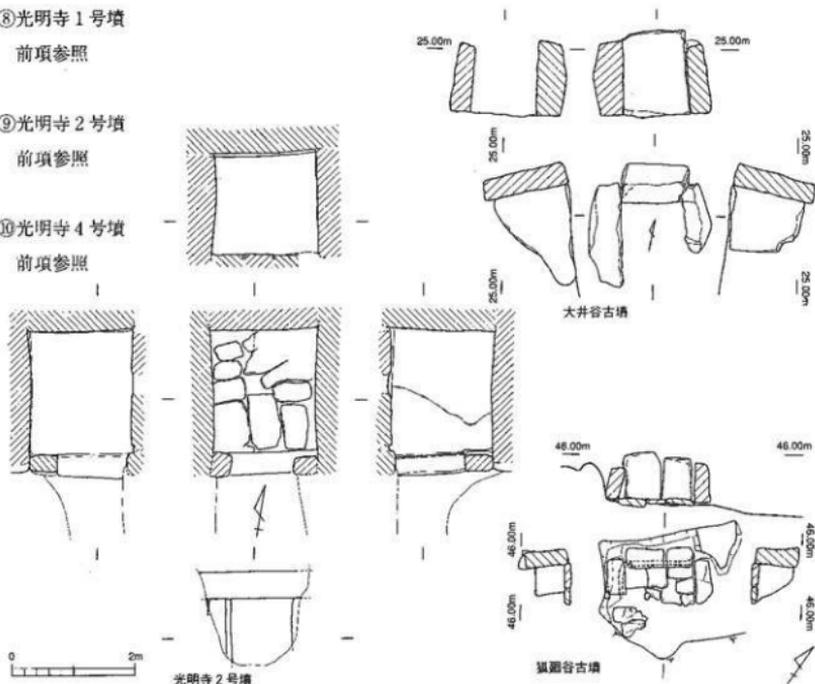
前項参照

⑨光明寺2号墳

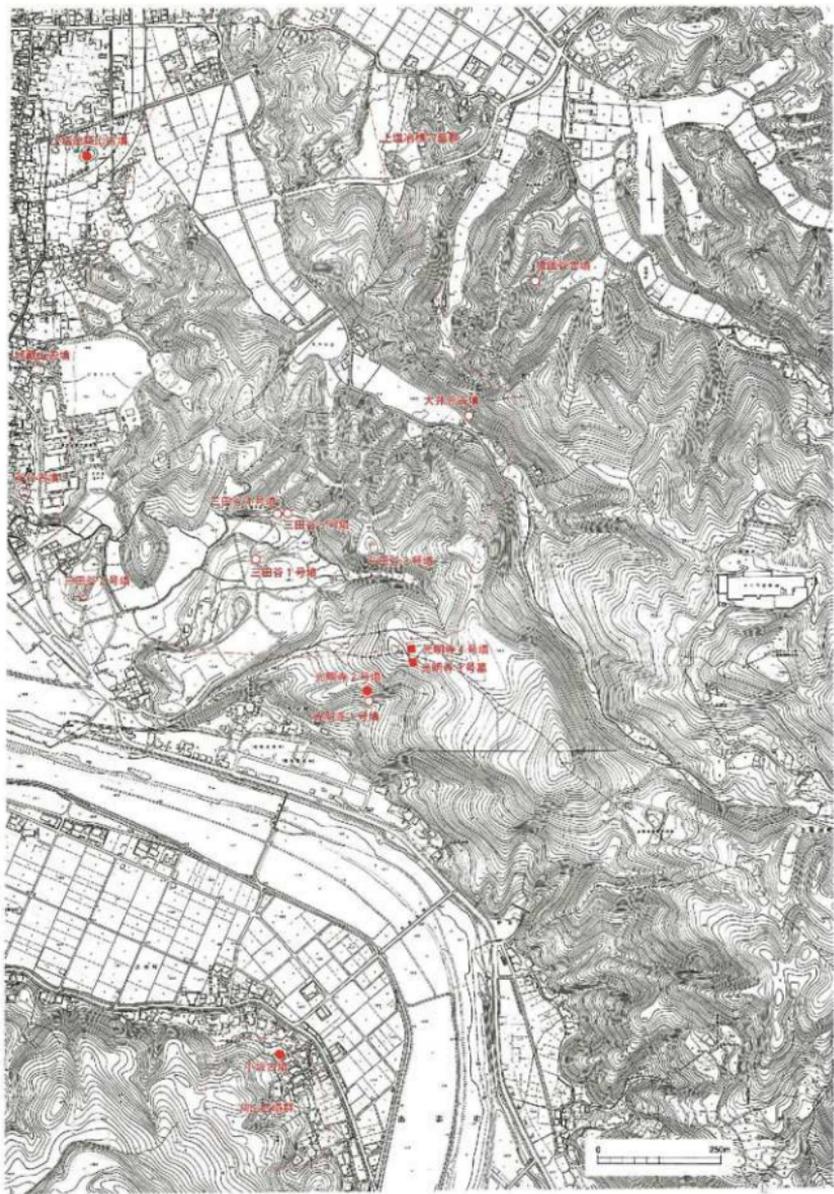
前項参照

⑩光明寺4号墳

前項参照



第30図 後・終末期古墳 石室実測図② (各報告書より転載。一部改変。) 1/80



第31圖 後・終末期古墳分布図（上塩治地域） 1/10000

2. 上塩冶地域における横穴墓群

上塩冶地域には築造数が全国でも最大級を誇る上塩冶横穴墓群が分布し、三田谷と大井谷に接する丘陵に形成される。この横穴墓群における横穴墓の初現は古墳時代後期後半（出雲3期・6世紀後半）であり、出雲4期にかけて、数は少ないものの玄室形態がアーチ形を呈する横穴墓が造墓される。出雲5期になると石棺式石室の影響を受けたといわれる玄室形態が家形を呈する横穴墓が凝灰岩に造墓されるようになり、出雲6期で爆発的にその築造数が増加する。横穴墓の築造は出雲7期（7世紀初頭）まで続き、それ以降にも追葬により横穴墓が利用されていたと考えられている。

3. 古墳と横穴墓

上塩冶地域では古墳時代後期後半を境として墳丘を持つ「古墳」という埋葬形態が減少し、古墳時代終末期には土や岩盤に直接穴を穿つ横穴墓が主流となる。では、古墳時代後・終末期における古墳と横穴墓とはどのような関係を持っていたのだろうか。

現在上塩冶地域で発見されている後・終末期古墳はそれ単独で成り立っていることが少なく、周辺には横穴墓群が存在していることが多いため、古墳と横穴墓は密接な関係を持っていると考えられよう。このことを考える上で重要な要因の一つとして副葬品の質の差が挙げられる。しかし、これまで上塩冶地域において調査された後・終末期古墳はその全てが盗掘若しくは崩壊している上、横穴墓についてもそのほとんどが盗掘などによりその詳細を知ることはできないことができないため、出土遺物によっては両者の関係を考える上で支障となっている。

現在では、築造するために相当な労働力を必要とするであろう墳丘を持ち、築造数も少ない古墳が、横穴墓に比べて上位に格付けられる傾向がある。しかし、上塩冶横穴墓第22支群からは金環、金糸が、第33支群からは金鋼装大刀の出土が見られるなどかなりの有力者が葬られたと見られる横穴墓も存在していることを考えると、単純に古墳が横穴墓の上位に格付けられるとは言い切れないと思われる。

4. 今後の課題

後・終末期古墳文化については多くの問題が残されているものの、上塩冶地域は古墳と横穴墓の両者の分布域が隣接しており、神戸川右岸に立地する古墳時代後・終末期における一連の墓域である可能性が大きい。また、この地域では古墳時代後・終末期に築造された10基の古墳と180基以上の横穴墓が確認されており、更に神戸川の対岸には刈山古墳群も分布している。刈山古墳群はほとんど調査が及んでいないものの小規模古墳が群集しており、これらの古墳や横穴墓群と並行する時期の古墳も多く存在していると思われる。これらを精査した上で、上塩冶築山古墳等の大型古墳を含めた周辺の古墳時代後・終末期の墓制について再検討し、出雲平野における古墳の終焉を解明していくことが今後の研究課題であろう。

参考文献

1. 鳥谷芳雄「三田谷Ⅱ遺跡1区の調査」(『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』島根県教育委員会 1994)
2. 守岡正司「上塩冶横穴墓群第33支群」(『上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塩冶横穴墓群』島根県教育委員会 1998)
3. 高橋智也・片倉愛美「三田谷3号墳」(『上塩冶横穴墓群 三田谷3号墳 石切場 大井谷Ⅲ遺跡』建設省出雲工事事務所・出雲市教育委員会 2000)
4. 伊藤 智「三田谷Ⅲ遺跡」(『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ』島根県教育委員会 1999)
5. 守岡正司「上塩冶横穴墓群第7支群」(『上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塩冶横穴墓群』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1998)
6. 守岡正司「狐廻谷古墳」(『上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塩冶横穴墓群』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1998)
7. 『上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会 1980
8. 西尾克己・大國晴雄「出雲平野の古墳」

出雲市上塩冶町光明寺3号壘火葬骨

鳥取大学医学部法医学教室

井上 晃孝

1. はじめに

出雲市上塩冶町地内の光明寺古墳群は、3基の古墳と1基の古墓から成る。

1号墳はすでに消滅、光明寺2号墳は古墳時代後期後半、3号墓は奈良時代、4号墳は古墳時代後期後半～終末期に相当すると考えられている。

光明寺3号墓は、石櫃を埋納した墳丘墓で、径約9mの墳丘をもち、表面は人頭大の葺き石で覆われていた。

墳丘中央部の真下には、石櫃（蓋の大きさ75×75×40cm、身の大きさ75×75×39cm）があり、石櫃の内側には丁寧な作りの蔵骨器（外径50cm、内径33cm深さ20cm）の円孔（円筒形）が掘削されていた。

その蔵骨器には、火葬骨がそこから8分目の高さまで納骨されていた。

火葬骨は、高温による完全焼骨(1)で、外面のひび割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらに著しい捩れなどの変形をきたし、その亀裂面、裂開面から破損、骨片化していた。

恐らく、蔵骨器に納骨する際、火葬骨をさらに小さく砕いた可能性が高い。

2. 火葬骨の掘り上げ（拾骨）

火葬骨の埋葬順序を知る手がかりとして、蔵骨器から火葬骨の掘り上げに際し、上から順に3層（上・中・下層）に分けて骨を拾骨した。

上、中、下層の火葬骨は、すべて骨片化していた。

各層とも、頭骨片、脊椎骨片、肋骨片、上・下肢骨（四肢骨）片が満遍に拾骨され、とくに、納骨時に意識的に納骨は行われていなかった。

火葬骨の遺残性

全般的に、完全焼骨で骨片化しており、骨の遺残性は不良であった。

納骨された骨の総量と検出された骨の部位から推定すると、納骨量はほぼ1体分相当である。

蔵骨器中の火葬骨

(1) 上層の火葬骨

腰椎骨：No不明の椎体部、肋骨突起部

仙椎骨：第1仙椎骨椎体部

胸郭骨

肋骨：左右不明の肋骨骨片

上肢骨

上腕骨：左上腕骨頭部の1部、左右不明の骨体骨片

尺骨：左右不明の骨体骨片

橈骨：右下端骨

下肢骨

寛骨：右寛骨臼窩部の1部、左右不明の腸骨稜の1部

脛骨：左右不明の骨体骨片

足骨：右距骨上面（上関節面）、左右不明、No不明の中足骨骨片

(3) 下層の火葬骨

頭蓋骨

頭骨：頭頂骨骨片、後頭骨骨片

下顎骨：左下顎体骨片

椎骨

頸椎骨：第1頸椎骨上関節面、No不明の椎体骨片

胸椎骨：No不明の椎体骨片

腰椎骨：No不明の椎体部と肋骨突起部の1部

胸郭骨

肋骨：左右不明の肋骨骨片（多数）

上肢骨

上腕骨：左右不明の骨体下部の骨片

尺骨：左右不明の骨体骨片

橈骨：左橈骨近位部の1部

手骨：左右不明、No不明の中手骨と基節骨骨片

下肢骨

寛骨：左右不明の腸骨骨片

大腿骨：左右不明の骨体の1部

脛骨：左右不明の骨体の1部、左下端部（内果部）骨片

足骨：左右不明の距骨上関節面の1部

3. 推定性別

火葬骨では、成人骨の収縮率は平均約10%程度(1)と云われており、本火葬骨の頭骨片と四肢骨片を見る限り、かなり厚い。

その上、四肢骨の筋付着部粗面の発達が良好であることと寛骨の大坐骨切痕の形状からして、本屍骨は男性骨と推定される。

4. 推定年齢

本屍骨は火葬骨であり、完形骨でないので断定はできないが、火葬骨を見る限り、本屍骨はすでに成人域に達している。

頭蓋冠縫合部は癒上の脱さはなく、鈍化している。

脊椎骨の胸椎骨と腰椎骨の椎体の上、下縁の棘形成が中等度にみられることから、本屍骨の年齢は熟年(40代～)が推定される。

5. 推定身長

本屍骨は火葬骨で、四肢骨はすべて小骨片化しているので、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

本屍骨は火葬骨で小骨片化しているので、骨折、疾患、奇形の痕跡は不明である。

7. 考察

1) 石製納骨器(蔵骨器)

奈良・平安時代の火葬骨を納めた納骨器は、圧倒的に須恵器、土師器といった類が多い。しかるに、石製蔵骨器は関東地方に多く、中国地方では比較的少ない。石製蔵骨器(石櫃)の中で、家形に蓋を加工したのは、近くの安来市荒島町中山遺跡の火葬墓(2)が類似しているが、蔵骨器(身)が方孔であるのに対し、出雲市上塩冶町の光明寺3号墓の場合は、蔵骨器(身)が円孔であり、地域的(?)類差がみられた。

2) 被葬者の火葬（茶毘）

遺残火葬骨を見ると、高温による完全焼骨で、色は灰白色～銀ねず色を呈し、外面の深いひび割れ、横方向の亀裂、長軸方向の裂開、著しい振れなどが著明に見られることから、被葬者は死後まもなく、火葬（茶毘）に伏せられたことが推察される。

3) 蔵骨器の火葬骨

蔵骨器の中の火葬骨は、小骨片のものまでかなり丁寧に拾骨されており、一部であるが手足の指節骨まで混入していた。

納骨された骨の総量と検出された骨の部位から推定すると、納骨量はほぼ1体分相当骨であると推察される。

本納骨器に埋葬された火葬骨は、炭化物がほとんど検出されていないので、恐らく火葬骨を拾骨し、さらに水洗して蔵骨器に埋葬された可能性が高い。

このことは、安米市中山遺跡の火葬葬(3)でも同様であった。

埋葬順序を知る手がかりとするために、上から3層（上、中、下層）に分けて、火葬骨の採取（拾骨）を行ったが、推定の部位毎に、火葬骨を納骨器に埋葬した様子は窺えなかった。

上、中、下層とも、頭骨片、脊椎骨片、肋骨片、四肢骨片がいずれも満遍に検出された。結果的には、上、中、下層とも骨の配置状態は、かなり攪乱状態で、納骨順序に一貫性はなく、無造作に納骨された感が強い。

4) 墓誌

奈良時代以降の蔵骨器中の火葬骨が出土すると、必ず墓誌の有無が問題となる。

中央またはそれに関連した人物の遺跡からは、墓誌を伴う火葬骨が出土することが、まれにあり、被葬者に対して文献的考察もなされてきた(1)(4)。

しかるに、地方から出土する火葬骨は、ほとんど墓誌を伴っていないく、被葬者を特定できず、単なる地方の有力者であろうと推察されるにとどまっている。

本事例でも、被葬者はこの地方のかかなりの有力者であるにもかかわらず、墓誌を伴っていないので、被葬者を特定しえない。

奈良時代末（8世紀後半）頃と推定されている鳥取県倉吉市向山出土の長谷遺跡は火葬骨の角合葬例(5)で、骨壺が2個検出され、中から成人男女の火葬骨が出土した。

恐らく、地方の高級官僚か豪族出身の夫婦であろうと推察されるが、これも墓誌を伴っていないので、被葬者を特定し得ない。

5) 喉仏

世間では、人の頸部前面中央部に位置する甲状軟骨の突起（男性では著明に出現）を喉仏といっているが、解剖学的に正確に言うと、第2頸椎骨（軸椎）の歯突起を喉仏という。喉仏は、その形態が仏に似ているところから、仏教の影響を受けて、中世時代では、すでに火葬骨の納骨時に、拾骨の対

象とされ、納骨器（骨壺ら）の最上壇の中央部に喉仏を安置する葬俗が一般化している(6)。

そこで、今回喉仏の安置状態を知るために、注意深く骨の拾骨を行った。

本意席と類似する納骨器を有する安来市の中山遺跡の火葬骨(3)と文献的に有名な奈良市の太安万侶の火葬骨(1)では、大量の火葬骨が検出されたにもかかわらず、第2頸椎骨（喉仏）は検出されなかった。

また、筆者も特に喉仏を意識した記載もしていない。

本納骨器の火葬骨からは、幸いにも第2頸椎骨の歯突起（喉仏）が検出された。

検出場所は、中層の壁際であるところから、未だこの時代には納骨時に喉仏を特に意識してなく、最上壇中央部に安置する葬俗（風俗）は、未だ確立されていなかったと思量される。

奈良時代末頃と推定される倉吉市向山の長谷遺跡の火葬骨の合葬例（成人男女）(5)でも喉仏は、両者とも検出されず、拾骨の際、特に、この時代は喉仏をとくに意識していなかったものと思量される。

8. まとめ

出雲市上塩冶町の光明寺3号墓は、奈良時代の遺跡で、火葬骨を埋納した石櫃を有する墳丘墓である。

土葬から火葬への移行する過渡期的のもので、全国的にも珍しいケースである。

石櫃の大きさは、蓋は75×75×40cmで、身は75×75×39cmで、中央部に外径50cm、内径33.0cm、深さ20cmの円筒形の蔵骨器が掘削されていた。被葬者（火葬骨）は男性、年齢は熟年（40代～）、身長は不詳である。

遺跡の規模からして、被葬者はこの地方のかなり身分の高い有力者であったと思量されるが、墓誌はなかった。

薄葬令による薄葬思想の発展と火葬の採用は、これまでの我が国の墓制史上、大変化であり、仏教の影響を多分に有する。

本蔵骨器の火葬骨を3層に分けて、拾骨を行い、喉仏（第2頸椎骨の歯突起）の場所を特定した。

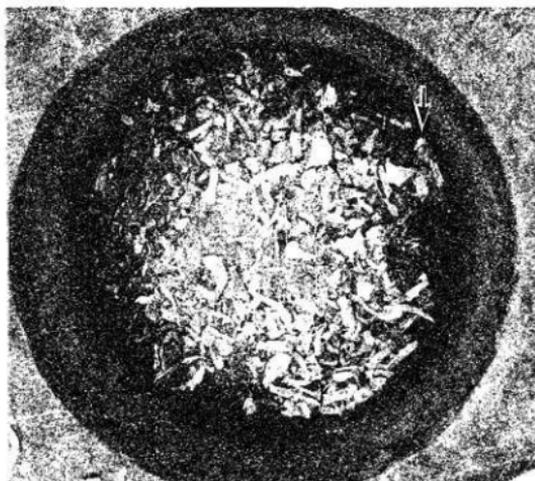
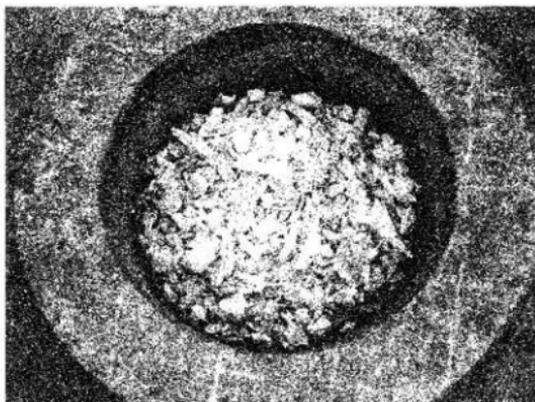
場所は中層の壁際に位置し、未だこの時代には、喉仏に対して葬俗の意味はなかったと推察され、喉仏をとくに拾骨の対象としては考えていなかったものと思量される。

文 献

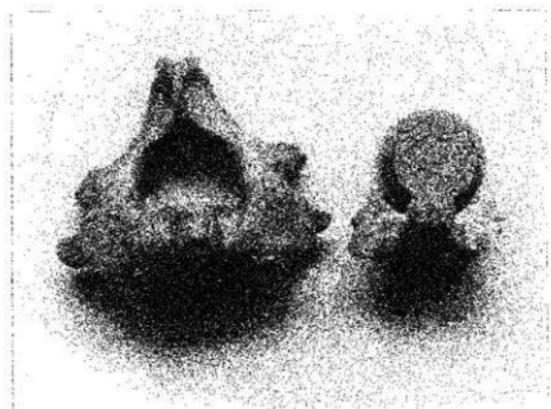
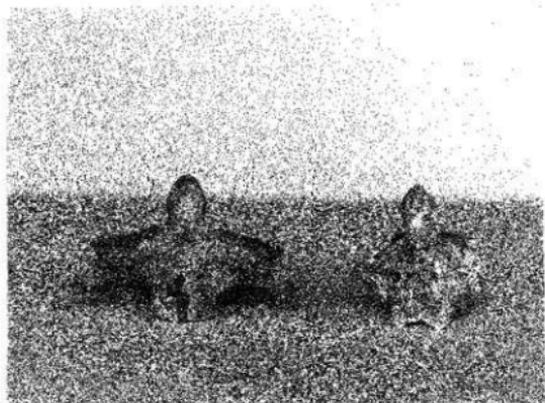
(1)池田次郎（1981）：出土火葬骨について、

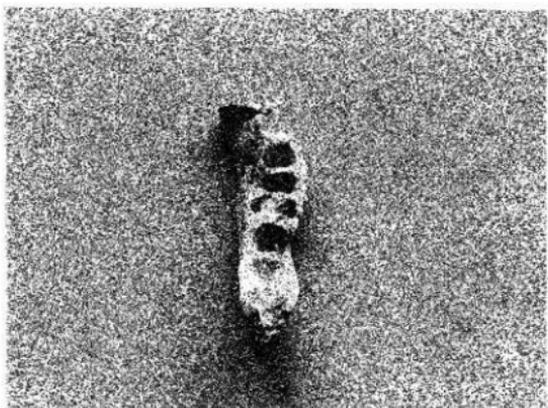
奈良県史跡名勝天然記念調査報告 第43冊 太安万侶墓 79-88, 奈良県立柏原考古学研究所編。

- (2)原田敏照 (1994) : 中山遺跡,
中山遺跡・巻林遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ, 21-27, 島根県教育委員会,
- (3)井上貴夫 (1994) : 中山遺跡の骨蔵器から検出された火葬人骨について,
中山遺跡・巻林遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ, 38-43, 島根県教育委員会,
- (4)三宅博士 (1980) : 火葬された人々
山本清監修 ふるさと文庫9 さんいん古代史の周辺 [下], 299-308, 松江山陰中央新報社,
- (5)井上見孝 (1992) : 3区古墓の火葬骨,
長谷遺跡発掘調査報告書 倉吉市文化財調査報告書 第76集, 106-109, 倉吉市教育委員会,
- (6)国分直一 (1985) : 吉母浜の中世墓制—特にその葬俗をめぐって,
吉母浜遺跡, 263-270, 下関市教育委員会,



矢印の骨が喉仏





出雲平野の石製骨蔵器

斐伊川放水路事業に伴う発掘調査により発見された、光明寺3号墓の石製骨蔵器は、鳥根県で5例目、出雲市では4例目となるものである。(石櫃、石製骨蔵器を合わせた例である。)

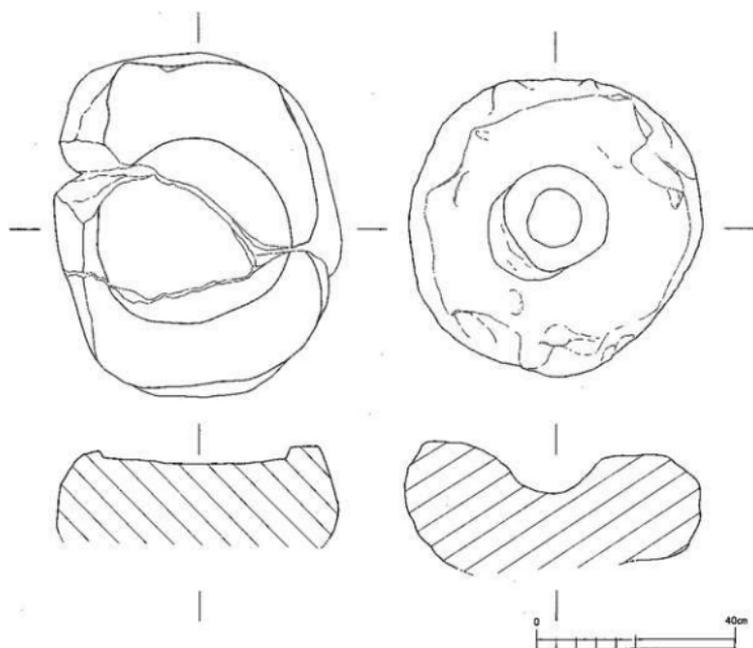
これまでの出土数はまだまだ少ないものではあるが、5例中4例が出雲市に、しかもすべてが半径2km以内の場所に位置しているということは、注目すべきことである。

わずか4例では、この時代の葬制や火葬墓について述べることは到底不可能であるので、全国各地の石製骨蔵器(石櫃)出土例と比較しながら紹介する程度にとどめたい。

なお、ここで石櫃というのは内容器を伴い外容器として使用されていたものを指し、石製骨蔵器とは、その中に直接人骨が納められていたものを指す。

・菅沢古墓(出雲市上塩冶町)

昭和33年5月開墾中に発見されたもので、標高40~50mの丘陵上に位置する。赤色粘土質の地山を



第32図 菅沢古墓 石製骨蔵器 実測図

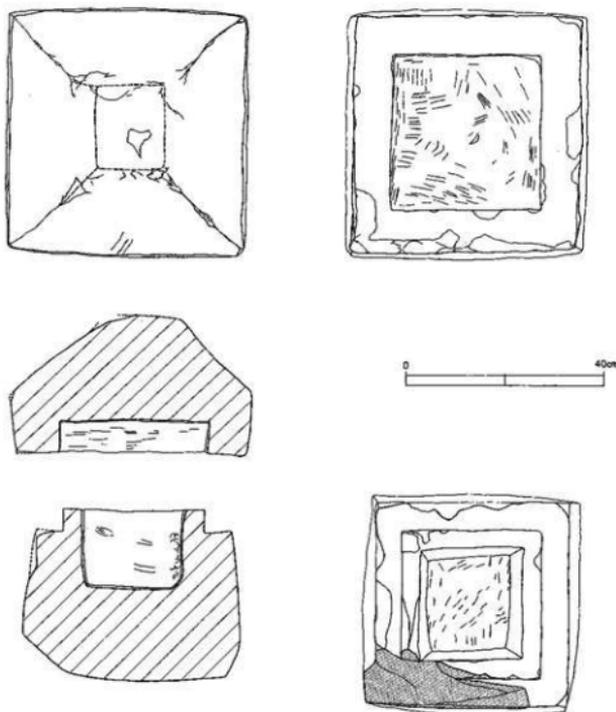
彫り込んで石製骨蔵器を埋納しており、盛り土等については不明である。

石材は凝灰岩で、身の径70cm、厚さ30cmの半球状で、中央に径25cm、深さ13cmの穴をうがち、内部に火葬骨を納めていた。蓋石は縦85cm、横70cm、厚さ27cmで、中央に径45cm、深さ5cmの円形のほりこみがあった。

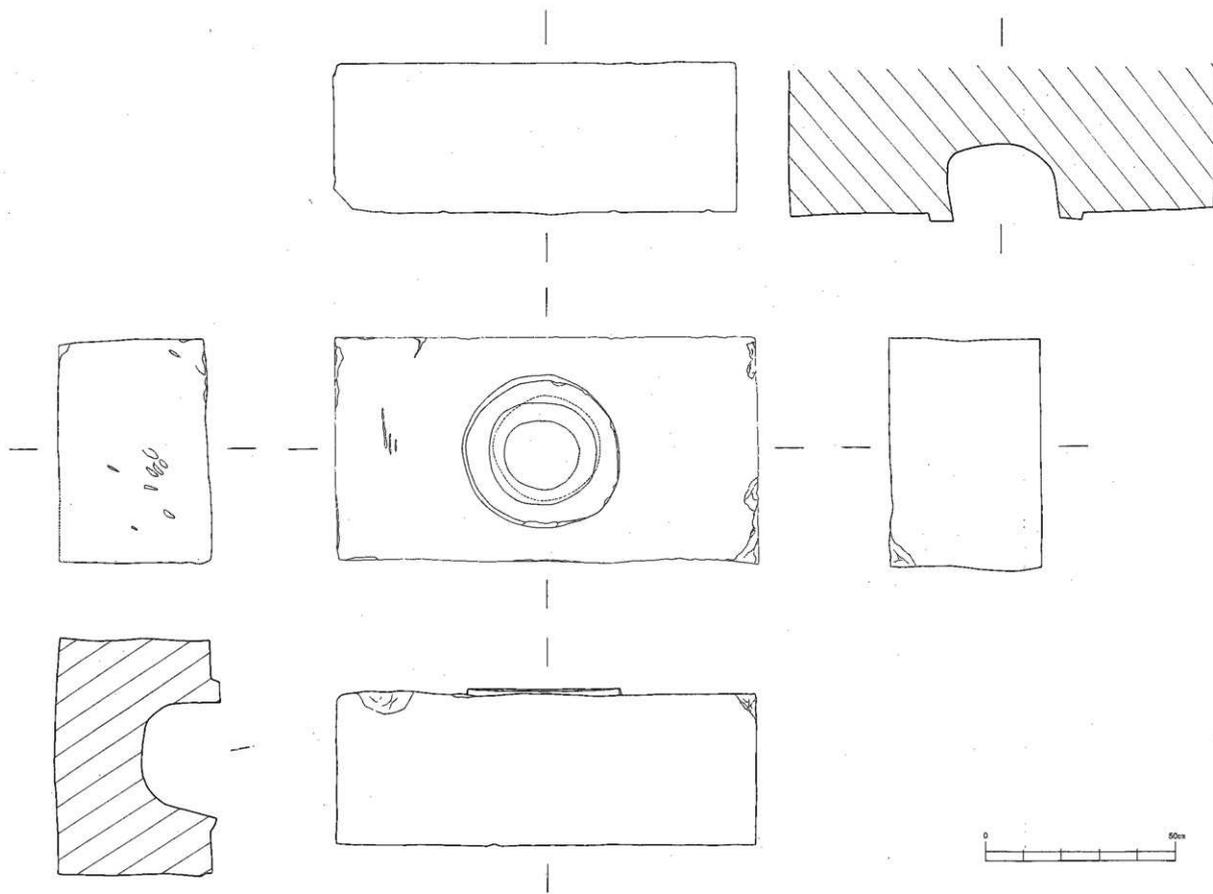
大型ではあるが、他の3例と異なり、外形については大きく加工された部分はなく、自然石を粗く加工し納骨穴を削り込んだ、という形をしている。

・朝山古墓（出雲市朝山町）

光明寺3号墓より約1km南方で、道路工事の際2個の石製骨蔵器が発見された。内1個は現地に埋め戻され、1個を出雲市教育委員会で保管している。一辺が約40cmの正方形で、身の中央に方形の納骨穴があり、内部に骨片が残存していた。蓋石の内面にも方形の加工が施され、印籠蓋となっている。蓋石の外周は四柱式屋根形に加工され、加工痕はほとんど確認できない。



第33図 朝山古墓石製骨蔵器 実測図（参考文献4より転載）



第34图 小坂古墳石室内石櫃 実測图

・小坂古墳（出雲市馬木町）

神戸川の左岸に位置し、水田面より20mほど高い丘陵に営まれている。径約15m、高さ3mの円墳である。全長5.2mの切石造の横穴式石室の内部に、縦1.12m、横0.61m、厚さ0.49mの石櫃が置かれている。石櫃上面のほぼ中央には、立ち上がりを持つ径28cm、深さ21cmの半球状の孔がうがたれている。この内面に緑青の付着が認められることから、銅製骨蔵器を納めていたと推定されるが現存していない。また、この石櫃の蓋となるような石も確認されていない。

出土した須恵器が2時期に分けられることから、まず7世紀前半に石室が築造され、その後石櫃を追葬したものと思われる。

石室内から巖手刀が出土しており、これは石櫃に伴うものと思われる。

このほか、安来市荒島町中山で中山火葬墓の石製骨蔵器が、鳥根県教育委員会により発掘調査されている。

鳥取県では岩美郡国府町より「伊福吉部徳足比売」の銘が記された銅製の納骨器及び石櫃が安永三年（1774）に発見されている。また、米子市青木遺跡より石製骨蔵器が出土しており、山陰両県でこれまでに7個体が出土している。

6個中4個が出雲平野、しかも半径2km以内のところ集中しているのは、注目すべきことであろう。しかし、個体数が少ないこと、いずれも開発中に偶然に発見されるなど、埋納状況が不明であり、遺物等が発見されていないことから、それぞれの年代、関係を追うのは不可能である。

100以上の石製骨蔵器（石櫃）が出土している群馬県でも研究は進んでいるが、そのほとんどが大正時代の開墾中の出土であるため、年代の特定は困難なものとなっている。大里仁一氏はその中で、以下のように分類している。

第1類A 骨蔵器の蓋身ともに概観は自然石で接合部を印籠造り加工したもの。

第1類B 外観はA類と同じで、接合部は平らに加工されるもの。

第1類C 外観は自然石で蓋が突出し、身の孔に組合わせるもの。

第2類A 蓋石の上部を寄せ棟状に身部も五面を成形し、孔の周囲を印籠造り。

第2類B 蓋身ともに外形は同じで、接合部を平らに加工している。

この研究を継承した津金澤吉茂氏はさらに整理して第3類（蓋を八角形に成形して、接合部を印籠造りにするもの）を加えている。

同じ論の中で、津金澤氏は第3類を8世紀末から9世紀初頭、第1類Bを10世紀後半に位置付け、第3類→第2類A→第2類B・第1類A→第1類B・第1類Cとしている。

さて、無謀ではあるがこれに出雲の石製骨蔵器（石櫃）をあてはめると、菅沢古墓のものは第1類A、朝山古墓は第2類AもしくはBにあてはまる。しかし、光明寺3号墓や小坂古墳のように、方形に加工したやや大型のものは群馬県内では確認されていない。また、年代を見ても光明寺3号墓は7世紀終りから8世紀にかけて、小坂古墳も出土遺物から9世紀頃の追葬と考えられている。

光明寺3号墓と類似した石製骨蔵器を持つと思われる静岡県清水柳北1号墳は、奈良時代前半代、

出土遺物からは8世紀前半と考えられており、大型かつ方形を呈するものは火葬導入直後に採用されたものではないか、との推測ができる。

群馬県内の石製骨蔵器（石櫃）も時代が下がるにつれて小型化しており、出雲市内の石製骨蔵器（石櫃）も、光明寺3号墓・小坂古墳→朝山古墓の順に当てはめられる。しかし、菅沢古墓のものはかなり大型であるため、いまのところどの位置に当てはめられるかは推測できない。

平成10年度の鳥根県教育委員会の調査で、火葬墓の集中する出雲市上塩冶町、馬木町に隣接する出雲市古志町の古志本郷遺跡より、郡家跡と考えられる遺構が発見された。時期的にも、火葬墓の被葬者はこの役所に関係があった人物ではないか、との推測も可能であるが、今後の互いのさらなる調査が待たれる状態である。

いずれにせよ、火葬という風習は大陸文化への憧れから広まっていったことは恐らく間違いないであろう。そうすると、大宝三年（703）に持統天皇、また、これまでに調査された火葬墓から出土している墓誌等をもみても歴史に名を刻んだ著名人が多いことから考えても、火葬は一部の限られた人々の葬法であり、古墳時代にある程度の塚を築き得た人たちの墓であると考えられる。経済的、身分的にもそれなりの条件が整った人々が、この地に墓を築いたのであろう。

今後は、どうしてこの地が葬地となったのかを解明することが課題である。

参考文献

- ・中山遺跡 巻林遺跡 ——一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ
— 1994. 3 鳥根県教育委員会
- ・出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告 鳥根県教育委員会
- ・青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ 鳥根県教育委員会
- ・古代の墓制（『群馬県史・通史編』2） 津金澤吉茂

光明寺3号墓の保存に至る経緯

光明寺3号墓は、建設省による斐伊川放水路事業にともなう工事用道路（後に市道に移管予定）新設のため、発掘調査を行った。そのため、当初の予定では、調査終了後に壊される運命にあった。

しかし、全国的にも珍しいマウンドの中に埋納された石製骨蔵器であること、また、背後に人工的と思われる斜面を伴っていることがわかり、有識者より「是非現地保存を」との声が高まった。

出雲市教育委員会としても前例のないことではあるが、遺跡の重要性を認識して現地保存を決定し、調査委託者である建設省出雲工事事務所との協議を重ねた。その結果、多くの人々の協力と理解を得て、現地保存にこぎつけることができた。

以下、保存に至る経緯を詳しく述べる。

- | | | |
|-------|--------|--|
| 1998年 | 4月27日 | 発掘調査開始 |
| | 5月29日 | 石製骨蔵器出土 |
| | 6月1日 | 出土後、調査指導。周辺斜面の関連を指摘される。
建設省との協議で、8月末までだった調査期間の延長を希望し、12月末までの延長の了承を得る。保存の可能性を伝える。 |
| | 25日 | 鳥根県文化財課による調査指導。専門家による調査指導を受けるようにとの指示を受ける。 |
| | 7月17日 | 奈良芸術短期大学 前園実知雄教授調査指導。全国的にも珍しいものなので、できれば保存した方がよいとの指導を受ける。 |
| | 9月24日 | 鳥根県文化財課による調査指導及び協議。保存の方向で建設省と協議するよう
にとの指示を受ける。 |
| | 10月15日 | 石製骨蔵器の蓋を開ける。 |
| | 11月9日 | 記者発表（遺跡の概要について） |
| | 29日 | 現地説明会 |
| | 12月 | 出雲市教育委員会としての現地保存の方針を決定し、調査委託者である建設省
出雲工事事務所に保存を要望する。これを受けて建設省は、当初は計画を変更
することは難しいとの回答だったが、協議を重ねる内に工事用道路ルートを変
更することで遺跡をルートから外す方法を示される。
ルート変更により追加して取得が必要な用地については、出雲市が取得すること、
また、用地交渉を出雲市が行うことで、建設省に遺跡の現地保存の了承を得る。 |
| 1999年 | 2月 | 地権者との用地交渉が終了。地権者全員から土地を市に譲渡することについて
の了承を得る。 |
| | 3月17日 | 建設省、出雲市教育委員会の共同記者発表。双方の協力により、現地保存が決
定したことを発表する。 |

加茂岩倉遺跡の銅鐸や、荒神谷遺跡の銅剣のように、誰が見てもすぐに貴重なものとわかるものであれば保存という方針もすぐに打ち出せたかもしれない。しかし、石製骨蔵器という普段耳慣れないものであったため、この遺跡の重要性について認識してもらうのは困難であった。

石製骨蔵器だけを持ち帰ればいいのか、移築すればいいのかという意見も多数あった。これらの意見に対しても「現地で保存することにこそ大きな意味があるのだ」ということを時間をかけて理解してもらった。

また、出雲市で開発に伴って発掘調査されたものを現地保存するということは前例がなかったため、重要な遺跡だとわかっていながらもなかなか現地保存の方針を打ち出せなかった。

しかし、松江市田和山遺跡や鳥取県妻木晩田遺跡など多くの遺跡の保存問題が起こっている中で、開発側と調査側が協議の中で現地保存を決定することができたのは、多くの人々の御尽力とともに様々な好条件が重なった結果だと考えられる。

1. 遺跡が位置する場所は斐伊川放水路事業に伴う工事用道路予定地であった。これは後に市道に移管されることが決定していたため、登記上は市有地であった。このことにより、ルートの変更により追加取得が必要な土地は、出雲市が取得することによって解決することができた。
2. 開発者である建設省が遺跡の重要性についていち早く理解を示し、遺跡保存に全面的に協力してくれた。現在も保存活用についての多大なる御協力をいただいている。
3. 追加取得が必要であった土地の地権者の方の御理解、御協力である。我々がお願いに伺った際、全ての地権者の方が即座に遺跡の現地保存について御理解をいただき、「遺跡を守り伝えることが市民のつとめ」とまでおっしゃってくださった。

この現地保存が決定するまでの間に痛感したことは、いかに文化財というものが知られていないか、ということである。最近では遺跡の保存問題も大きく取り上げられるようになり、積極的に保存されているようにも見られるが、その陰で十分な調査がなされないままに破壊されている遺跡も少なくない。開発が年々増えている今だからこそ、専門家のものだけになりがちで遺跡、研究成果をより多くの人に知ってもらい、遺跡に親んでもらうかは、これからの課題である。

これまで文化財は開発を妨げる邪魔な存在でしかなかった。しかし、これからは破壊するだけでなく文化財を活かしていくことが要求されている。遺跡を壊すことは一瞬でできるが、二度と元に戻すことはできない。文化財＝邪魔者と結びつけてしまう前に共存していくことはできないか、開発側と保存側がともに考えることが不可欠であろう。

文化財の歴史的意義を一人でも多くの人に理解してもらえるよう努力することが、文化財行政のみならず、開発を行う側にとっても責務だと考えている。

光明寺古墳群は2号墳と3号墓のみが残っているが、今後より多くの方々に見学していただけるよう整備について検討中である。

写真図版

光明寺 3号墓
調査前（北側から）



調査前（北東から）



マウンドと後方斜面





マウンド 石検出状況



石製骨蔵器検出状況



石製骨蔵器（西側から）

火葬骨検出状況



マウンド及び骨蔵器
(南側から)



火葬骨

